

大門町埋蔵文化財調査報告第9集

農道整備事業調査改良工事に伴う発掘調査報告

富山県大門町

串田新遺跡 VII

1994年3月

大門町教育委員会

序

豊かな自然に恵まれた大門町には、南方に連なる丘陵地を中心として、各時代にわたる遺跡が数多く存在します。これらの遺跡は郷土の歴史を知るうえでかけがえのない史料であり、当時の生活や先人の苦労を偲ぶことのできる貴重な文化遺産であります。ところが、土地改良事業や企業団地の造成など、大型開発が次々に実施され、貴重な文化遺産が消滅していこうとしている今日、祖先が残した文化遺産を保護、保存し、子孫へ伝えていくことが現代社会に生きる私達の重要な責務であると言えましょう。

この報告書は串田新遺跡西側の農道整備事業に先立って実施された発掘調査概要をまとめたものです。幸いにもこの串田新遺跡は、昭和46年より数回にわたって発掘調査が行われ、昭和51年9月に国史跡の指定を受けるとともに史跡公園として整備されている場所でもあります。

この報告書が、多くの人々に活用され、地域の歴史の理解と文化財保護の一助となることを願ってやみません。

終わりに、調査にご援助並びにご協力いただきました地元の方々及び、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

大門町教育委員会
教育長 野上 和雄

例　　言

1. 本書は、大門町教育委員会が、平成5年10月～12月に実施した串田新遺跡西地区の発掘調査の報告書である。
2. 調査は、大門町新田地内農道整備事業調査改良工事に伴う調査として、大門町産業課の依頼により大門町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 発掘調査及び遺物整理作業などの実施にあたっては、大門町教育委員会が富山県教育委員会・富山県埋蔵文化財センターに職員の派遣を依頼して行った。
4. 調査事務は、大門町教育委員会職員の協力と主任佐々木芳子の補佐を受けて、社会教育係長谷内口数尚が担当し、教育次長吉藤恒雄が総括した。
5. 調査遺跡の面積・期間・担当者等は、以下のとおりである。

試掘調査

調査期間：平成3年12月20日の1日間

調査担当者：富山県埋蔵文化財センター　主任　関　清、文化財保護主事　島田修一

調査面積：110m²

所在地：大門町串田新304外

本調査

調査期間：平成5年10月4日～12月7日までの39日間

調査担当者：富山県埋蔵文化財センター　主任　橋本正春

調査面積：1,000m²

所在地：大門町串田新304外

6. 本書の編集と執筆は、橋本と大門町教育委員会が行った。
7. 遺物整理作業などは、橋本が担当し、次の諸氏の協力を得た。

鶴森羊子・塙村昌子・端崎宏子・神田勝代・田島美和子・福葉由美・三宝綾美・元村加代子・名苗静子・松田光子

8. 発掘調査にあたっては、下記の諸氏の協力を得た。

山崎健治・松井宗騎・郷田為吉・薗原正信・石黒政邦・小林嘉徳・小川昭二・松井伊弉・坂森英美子・坂森改子・奥谷くに子・森田好子・田中たま・北条みな・池田浪子・稻垣イミ子・南と志子・南津喜女・出畠春子・坂ロシゲ・山本美津子・明地みのり・高田悦子・西垣はる子・高田みち子・山本よし子・寺井ひろ子・岡野静子・山本しづ子

9. 本書の作成までにあたっては、「下記の諸氏の貴重な指導・助言をいただいた。記して謝意を表します。

小島使彰・舟崎久雄・岡本淳一郎・島田修一・伊佐智法・生駒勝浩・河西健二・麻柄・志・高慶孝・原田義範・稻垣尚美・安念幹倫・山口辰一・吉井亮一・狩野暉・斎藤隆

10. 発掘調査事業に多大なご理解とご協力を示された地元関係各位に末尾ながら記して謝意を表します。

大門町水戸田・串田・荒町・松原・本村・宮新田・新田・梅ノ木・大久保地区・大門町産業課・総務課・企画財政課・柳田神社・柳田小学校・柳田公民館・柳田駐在所・大門町シルバー人材センター・大門町陶房「匠の里」・正力図書館・町文化財審議委員会

11. 図版類の縮尺は、図版下に示した。方位は真北を、高さは標高を用いた。表中では、言葉を省略して表現したところがある。

12. 平成5年度の発掘調査関係の資料及び出土遺物は、富山県埋蔵文化財センターが保管する。

目 次

序	第1図 大門町と周辺の遺跡
例 言	第2図 地形と調査区位置図
目 次	第3図 遺物出土状況図
I. 序 章.....	第4図 遺物実測図土器 (1/3)
1. 遺跡の位置と環境.....	第5図 遺物実測図土器 (1/3)
2. 既 往 の 調 査.....	第6図 遺物実測図土器・土製品 (1/3)
3. 調査の経緯と経過.....	第7図 遺物実測図石器 (1/3)
II. 調査結果.....	第8図 遺物実測図石器 (1/3)
1. 綱 文 時 代.....	第9図 遺物実測図石器 (1/3)
(1) 遺 物.....	第10図 遺物実測図石器 (1/3)
(2) 遺 機.....	第11図 出土石器位置図
2. 弥 生 時 代 以 降.....	第12図 編集図 昭和24年度及び 昭和46年度以降調査区位置図
(1) 遺 物.....	第13図 編集図 綱文時代及び古墳時代遺構概略図
(2) 遺 機.....	第14図 編集図 先土器時代及び 縄文時代出土遺物
III. 調査の成果.....	第15図 編集図 縄文時代出土遺物
(1) 過去の調査結果.....	第16図 編集図 縄文時代及び 古墳時代出土遺物
(2) 今年度調査結果との比較.....	第17図 編集図 古墳時代出土遺物
IV. 参考文献.....	第18図 打製石斧・石錐形状分布
圖 版	第19図 遺構図
写 真	第20図 石群出土状況
表 1 串田新遺跡遺構・遺物一覧表	図版 1 1・2 遠景
表 2 串田新遺跡調査地一覧表	図版 2 1・2 遠景
表 3 石器計測表	図版 3 1・2 全景
表 4 串田新遺跡編年表	図版 4 調査区中央
	図版 5 調査区中央石群出土状況
	図版 6 1~7 調査区 中央遺物出土状況 8~11作業風景
	図版 7 出土遺物土器
	図版 8 出土遺物土器・土製品
	図版 9 出土遺物石器
	図版 10 出土遺物石器

I. 序 章

1. 遺跡の位置と環境

遺跡の位置 串田新遺跡が所在する大門町は、富山県西部に位置し、射水平野中程から山間地にかけてにあり、庄川右岸にある。大門町の西は、庄川を挟んで高岡市、東は小杉町、北は大島町、南は高岡市と小杉町に囲まれている。町の南は、丘陵地が広がり、北側の大半は平野部である。

遺跡は、串田新地内の通称人沢山（本書では串田新遺跡の乗る丘陵を大沢山・丘陵・台地と表現する）と呼ばれる独立丘陵上にある。その大沢山は、標高約45m、広さ東西約150m・南北約450mの長方形を呈し、下方の平野部（水田）との北高差は約15m程ある。また、大沢山の東側は、和田側の侵食による崖がある。大沢山一帯は射水丘陵西端あたり、丘陵部は主に泥岩・砂質泥岩などの互層で堆積岩地層となっている。基盤岩は、新第三紀中新世海成層の青谷泥岩である。大沢山から西側では庄川段丘疊層・和田川段丘疊層がある。

大門町の遺跡 大門町の遺跡は、近年の調査により遺跡数が増加し、県道跡合帳（「富山県埋蔵文化財包蔵地地図」富山県埋蔵文化財センター1993）によれば平成5年度現在で47遺跡が確認されている。

代表的な遺跡を見てみると、最古は約一万年前の先土器時代の石刃が1点発見された本遺跡（昭和55年調査時）と生源寺新遺跡（通称南郷遺跡・昭和26年学校建設時）の二遺跡があげられる。

次の縄文時代になると遺跡数が多くなり17遺跡にまで増加し、前述の二遺跡の他に小泉・二口・生源寺新遺跡などが加わる。また、調査例も増え、縄文時代の生活が判りつつある。遺構では、木遺跡で縄文時代中期の住居跡が検出されており、遺物では土器と共に打製石斧等数多くの石器が発見されている。

弥生時代は、県内も含めてこれまで確認例が少なかったが、当町でも近年の調査により縄文時代に並ぶ12遺跡と遺跡確認数が増加し、布目沢北・堀内・繩田遺跡などがあげられ、溝や数多くの遺物が検出されだしている。

次の古墳時代も遺跡数が多く当遺跡を含めて16遺跡となっている。古墳では、本遺跡例を初め、県指定の大塚古墳が代表例としてあげられ、他に南郷中学南古墳などもある。遺構では、本遺跡で住居跡が確認されており、布目沢北遺跡では、平成3年度の調査で方形周溝墓を含む多くの遺構が検出されている。

奈良時代以降は、古代を含めると町内の遺跡のはば半数が該当し、布目沢北・生源寺南遺跡などがある。中世では數少なく二口五反田・鶴田遺跡などがあり、近世になると生源寺遺跡が該当する。また、布目沢地内で越前の堺から占鉄（約二万数千枚 93kg）が出土したとされている。

平面的な広がりをみると当遺跡や流田遺跡群などの山間地から平野部にかけての遺跡と布目沢北遺跡などの平野部の遺跡とに二大別できる。平野部の遺跡は、さらに町中央部の遺跡群と大島町側の北方の遺跡群とに分かれる。

町の文化財他 遺跡以外の文化財などをみると、串田新地の大沢家（加賀藩時代軒煎職）の庭に生えている樹高7m樹令約400年の「串田のひいらぎ」1株（昭和40年県指定天然記念物 植物）、当地域の植生が渾合良く残されている梅田神社社叢、生源寺の一里塚、西広上の「あしつき」などがある。絵画では、明徳寺の木尊絵像、梅田神社の絵馬額、彫刻では公道神社の古神像、光源寺の石仏、文書では折橋家文書などがある。他に、二口熊野神社と梅田神社の火渡り神事や牧田の獅子舞なども良く知られている。

2. 既往の調査

戦前の調査 富山県で最初の考古学調査は、明治40年吉田文俊氏による富山市北代遺跡と観音貝塚の調査である（斎藤1981）。次いで、県史によると明治41年福岡町城ヶ平山腹に城ヶ平横穴群が発見されたことに起因する調査となる（富山県1972）。また、大正7年になり日本初の洞窟遺跡水見市大境洞窟遺跡が発見され、学術調査が実施されている。その結果、6枚の文化層が検出され、下層が古く順序良く各時代の遺物が堆積していることが判明した。また、

大正10~13年には、水見市朝日貝塚の調査が現在の東京大学人類学教室の協力を得ておこなわれている。これら大正年間の調査は、県内ののみならず全国的に知られ、当時としては大規模で科学的な調査であった。

そしてこれらの調査の反響の大きさを知り、また、影響を受けて、各地で調査がなされだすようになった。このように遺跡への関心が高まりだし、終戦後の昭和24年になると富山考古学会が発足し、会として発掘調査も実施しだすようになってきた。

串田新遺跡の調査 ちょうどこの頃同時に活躍したのが小杉高等学校地歴班である。その小杉高等学校地歴班が昭和24~25年にかけて串田新遺跡の調査を行ったことが本遺跡の紹介の端緒（昭和24年に地歴班員が備山小学校の土器片を実見）となっている。この小杉高等学校地歴班の遺跡調査は、富山県内で、遺跡調査そのものが少ないので、小規模な調査とはいって行政機関や学会以外の学校クラブが学術調査を行い、その後今でも活用できる調査報告書を刊行していることは特筆すべきことである（富山懸立小杉高等学校地歴班1952）。調査報告書は、約30P B5版で、遺跡の位置、経緯、経過と遺構、土製品、土器、石器、まとめが12Pに渡り記述されている。また、今でも活用できる実測図（遺構、遺物、写真を含む）が15P載せられている（第2図）。

そしてその後、本遺跡出土土器は、調査のため石川県に来ておられた山内清男博士（東京大学人類学教室）が実見され、北陸の縄文時代中期から後期の時代を決定する事のできる土器として北陸地方縄文時代土器編年式の標式「串田新式」と提唱された。それを受け、昭和26年に渕氏が縄文時代中期上山田式と後期氣屋式の間に串田新式を配して発表された（渕1951）。翌年の昭和27年になると九学会合同調査能登が行われ、昭和28年の結果発表により串田新式を含めて北陸地方縄文時代土器編年の大構がかたまた（高掘1955・小島1972）。

一方、串田新遺跡の調査は、昭和24年の小杉高等学校地歴クラブの調査から始まり、昭和46年になり第2回目の調査が大門町と富山考古学会の合同で実施されている。第3次調査は、翌年の昭和47年に富山県教育委員会による調査が行われ、それら二回の調査の結果、縄文時代中期後葉の住居跡1・石組が6・穴が検出され、台地上に集落の存在が予想された。また、古墳時代初めの古墳3基と古式土師器も確認されている（大門町教育委員会1972・橋本他1973）。

そして、これらの調査結果（台地上で縄文時代中期後葉の集落と古墳時代初頭の古墳群等）と古くから北陸地方縄文時代土器編年式の標式遺跡などと古地図上の遺存状況が良いなどから昭和51年9月に国指定史跡に指定された。この指定を受けて昭和52年度から環境整備事業が実施された（大門町1977）。

昭和54年度からは、町村段階としてはいちはやく文化財保護のための専門職員が配置され、環境整備に伴う調査が行われるようになり、調査は（範囲確認調査と試掘調査）昭和56年度まで実施された。そして、それに伴う報告書も3冊刊行されている。その後、惜しくも専門職員が退職したため文化財保護行政としては後退した形になったものの、昭和58年度には基本整備が無事終了し、それに伴う「串田新遺跡・整備事業概要」（大門町教育委員会1983）が出された。現在は公園となっており、地元住民も活用する憩いの場となっている。

3. 調査の経緯と経過

これまでの経緯 昭和56年度以後の調査は、町の依頼により、県教育委員会の町内の遺跡分布調査などが行われていた。そして平成3年度になり、串田新遺跡の北側斜面下にあり、東西に伸びる町道の改良・拡幅工事を大門町（産業課）が計画した。道路の工事計画地内は、遺跡の範囲内であるため工事実施前に遺構及び遺物包含層が存在するかどうかの確認のための試掘調査が必要であるため、大門町産業課と町教育委員会と県埋蔵文化財センターの三者で事前協議をもった。三者の合意として、大門町教育委員会が調査主体となり県埋蔵文化財センターから職員を派遣し、事前に調査を実施することとして平成3年12月に試掘調査（対象面積約2,200m²）を行なった（第2図）。

調査は、遺跡東側（備山神社側）から4地区6箇所の試掘区を設定し、機械と人力により掘り下げた。その結果、



第1図 大門町と周辺の遺跡

1. 車田新道跡 (國史跡)
2. 本日沢道跡
3. 小泉道跡
4. 大塚古墳 (國史跡)
5. 小杉丸山道跡 (國史跡) 及び小杉流国内道跡群
6. 上野道跡及び太閤山田地内道跡群
7. 塙電寺
8. 北高木道跡
9. 常国道跡



第2図 地形と調査区位置図（右全体、左調査区区割図）

調査地区中央部以東の3地区4箇所の試掘区では遺構及び遺物包含層は検出されなかった。調査地区中央部以西の1地区2箇所の試掘区（4TA・B）で遺構及び遺物包含層が検出された。そこで、この地区は今後工事が実施されるならば記録保存を前提とした本調査が必要となった。これら試掘調査結果を受けて、大門町と県埋蔵文化財センターで遺跡保有のための協議を行った。しかし、大門町は工事を当初計画どおり実施することとして県埋蔵文化財センターに本調査のための職員の派遣を依頼してきた。

平成5年度になり再度町から調査及び職員の派遣要望があり、試掘調査同様に、大門町教育委員会が調査主体となり県埋蔵文化財センターから職員を派遣し、10月から本調査を実施することとなった。

調査の経過

平成5年春及び夏に調査着手に向けての協議を行い、10月から調査面積約1,000m²、調査期間約2箇月間の予定で本調査を実施することとした。事前準備として、調査区内の既存道路の盛土除去（機械による排土）と基本杭打設（10m間隔、測量業者委託）を行ってから本調査に入った。

調査区は、幅約8m長さ約130mの長方形を呈しているが、中央部で少し折れ曲がるため、中央部以東を東地区中央部以西を西地区とした。また、西地区の中央部細半分の地区から遺物が大量に出土したため集中区とした。

調査は、人力により遺物包含層を少しづつ掘り下げていった。遺物包含層発掘は、東地区から中央部に向かって行なった。西地区は、東地区に比べて遺物包含層が厚く、特に集中区は分厚く遺物出土量も多かったため、遺物包含層発掘は西地区西端から行い、集中区を最後とした。集中区の遺物包含層発掘中に石群が検出されたため、図面作成と写真撮影などの記録を行った。

なお、この頃に調査区全体と台地上の史跡地区（串田新遺跡）を含めた上空からの全景写真撮影（ラジコンヘリ使用、写真撮影業者委託）を行った。この写真撮影は、秋から冬にかけての調査であるため調査終了時期に上空からの写真撮影を行うと北陸地方特有の天候に影響されて、撮影可能日が極端に少なくなるため、天候の安定しているこの時期に撮影した。

遺物包含層の発掘終了後には、調査区全体の遺構検出を実施した。遺構検出の結果、東地区にはほとんど遺構がなく、東地区中程から中央部にかけて穴などが少し検出され、西地区はほぼ全体に穴や土坑などが検出された。そこで遺構の少ない東地区から遺構掘を開始した。

遺構掘は、遺構数が少ないため、遺構掘と同時に図面作成などの記録を行った。そして、終了した地区から順に再度の遺構検出を兼ねた清掃を実施した。清掃終了後には、調査区全体と各遺構の写真撮影を行った。

この後、調査区全体の図面作成（一部測量業者委託）を実施した。最後に、下層確認のための深堀（幅1m、西地区から中央部）を実施して終了した。

現地の発掘調査終了後に、現地で大門町産業課・町教育委員会と県埋蔵文化財センターの三者で発掘調査終了に伴う協議を行い、現地調査は終了し、引きつづき遺構や遺物などの整理作業及び報告書作成を平成6年3月まで県埋蔵文化財センターで大門町教育委員会担当者と調査担当者が実施することとした。また、遺構や遺物などの整理作業及報告書作成終了後の遺物や記録資料などは県埋蔵文化財センターで保管・管理することとした。

なお、現地調査中も出土遺物や記録資料類の整理作業を現地で実施していた。

II. 調査結果

串田新遺跡を発掘調査した結果、遺構では縄文時代の石群と時期不明の穴・土坑・溝が、遺物では縄文時代中・後期の土器・土製品・石器・弥生時代の土器・古墳時代の土器・近世の陶器が集中区を中心として検出された。

東地区の地形は、串田新遺跡史跡地区からの斜面の続きが検出され、南側が高く北側が低い地形となっている。史跡地区からの斜面の続きは、調査区が折れ曲がり次第に離れていくこともあり、斜面地形は東地区から中央部地区までで、西地区は平坦な地形となっている。西地区中央部では少し低く窪地状となっており、北に向かう谷地形がみられる。西地区が谷地形であるためか東地区に比べて遺物包含層と表土（耕作土）が厚く堆積している。第1層は、旧表土を含む表土と盛土で中央部で60~80cmあり、北側は一段低くなっているため30~40cmで、さらに道路の盛土が表土の上にあった。また、東端では20cm程で、西端では30cm程であった。第2層は、遺物包含層で黒褐色を呈し、中央部が最も厚く30~40cmあり、両端部では5~10cmで、上の方は、明るく下部は黒色が強い。第3層は、地山との漸移層で明褐色粘質土である。第4層は、地山層で明黄色粘質土である。また、遺物出土量も調査区中央部から西地区の谷部にかけてが多かった。

なを、本書では、串田新遺跡の史跡地区を便宜上次のようにまとめた。台地上は、縄文時代住居跡が集中する西地区・古墳群がある中央区、それ以東を東地区とする。そして、今回調査地区は、遺構遺物の集中する中央（集中）区とそれを挟んで以東を東地区、以西を西地区として表現する。

1. 縄文時代

縄文時代の明確な遺構は、他の時代も同様であるが、今回調査区内で検出された遺構出土の遺物がないため、現段階では石群以外はない。唯一土坑出土の縄文土器破片2点があるが、近世以降、現代の土坑であるため、縄文土器は混入品である。

遺物では、縄文時代中・後期の土器・土製品・石器がある。縄文土器では、中期と後期の土器が出土し、特に中期後半から後期初めにかけての土器が主体となる。出土区としては、集中区が中心となる（第3図）。

(1) 遺物（第4~10図 図版第7~9）

縄文時代中期前半の土器

中期の土器は、遺物（土器）全量の1割程度しか出土しなかった。出土位置では、地区全体から出土し、まとまりはみられなかった。

1~20は、半裁竹管文をもつもので、その中で13・16・17は縄文地などである。2・5・6は、「c」字状の爪形文をもち、3・4は細い沈線で格子状とし、1・3・10は三角形の刺突をいれ、なかでも1・3は蓮華文としている。6は爪形文をもった半裁竹管文の頸部下が木目状の然糸文となる。16も6と同様の木目状の然糸文破片である。11は、粘土紐を貼り付けた隆帯上を棒先で列点文とし、13は縄文地の口縁部破片で、突起状の盛り上がりがある。7・12は、底部破片である。17は、口縁部を折り返し、外面全体を縄文地とする。19は、半裁竹管文で渦巻状の円弧文としている。20は、胴部破片で、円弧文の間を串状具の先端を押しつけて縄目状（図版第8）としている。中期の土器は、口縁部がやや少し外方に開く深鉢形土器となるが、13は口縁部が内傾する。1~4は、中期前葉、5~16は中期中葉、17~19は中期中葉~後葉で、20は、器形などが不明であるため時期は明瞭でないが中期中葉としておく。また、土器以外の遺物は現段階では確認していない。

縄文時代中期後半の土器

中期後半の土器は、土器全量出土量の9割近くを占め、中期前半の土器と同様に地区全体から出土している。土器は、小破片が多く29・128・133など幾つかが大破片と言えるもので、表面が風化して文様が不鮮明な土器が多かった。

このため、代表的な土器と器形が判るものを中心に図化したため土器総量の三分の一程度しか扱わなかった。

21~29(除26)は、粘土紐を貼り付けた隆帯横にヘラ状具の先端を使って細い沈線を平行して引き、葉脈状文とする群である。葉脈状文の沈線の大きさでは、23が一番細く大半が細目であるが、25は太めとなる。葉脈状文の基線では、28が太く幅広の粘土紐で、21・23~25・29は細い粘土紐で、22・27は基線が沈線である。葉脈状文の施文部位では、29が口縁部で、21・27が口縁部下で、他は胴部である。

26~101(28・29・99・100を除く)は、口縁部から胴部にかけて粘土紐を貼り付けた隆帯をもち、棒状具の先端を使って沈線を引いたり、刺突する群である。口縁が波状口縁となるのは、30~32・38・47・55などで波頂部が一側の代表例は30・32・38で、波頂部が二側で双頭波状口縁となる例は31と46などで、55は平縁かもしれないがゆるく盛り上がっている。30は、波頂部が内面側へ押されている。31は、内面に2条の沈線が平行して引かれており、他は沈線が引かれていない。その他の口縁部破片は平縁である。33・34・48は、内面に2条の沈線が平行して引かれている。

30などは、隆帯横と両脇に棒状具の先端を使って円形と方形を基本とする刺突を施し、刺突は一列に並ぶ雨滴状列点となる。35は、隆帯間に方形刺突を施し、43は、平行沈線間に円形刺突を施し、胴部を繩文地としている。29などは、隆帯上に棒状具の先端を使って刺突を施すもので、一側ずつ丁寧に施文する例と連続して行い穴が流れるものとがみられる。また、穴は円形・方形・正方形などがある。

34などは、棒状具の先端を使って沈線を引くものである。33は、平行する沈線で工字状文区画を作り、工字状文との間に縦の短い沈線を間をあけて一列に繰り返し施す。34は、平行する沈線で工字状文区画を作り、その中を葉脈状の沈線を連続して施す。37は、平行する隆帯間に縦の短い沈線を平行して繰り返し施し、隆帯上には貝殻の刺みのある先端部分を押しつけて細長い筋状の押印文を平行に施文している。同例は47や48などである。この貝殻による押印文を工字状文区画内に施すのは、45などで、工字状文間に施すのは48(図版第8)などで、口縁部に施すのは52などである。40~42は、同一個体の可能性がある上器で、平行する2本の沈線で大きな曲線を描いて「U」字状とし、それを連続させ、胴部は繩文地となっている。54は、胴部破片で1本の沈線の上に斜い短い沈線を平行に間をあけて繰り返し施し、下半は繩文地とする。55は、口縁部破片で、2本の平行する沈線をめぐらすが、その沈線は波頂部付近であるためか一度で引かず、破片内で4回に分けて引いている。また、沈線の下には一定の幅を持つ縦の筋が見え、おそらく木口によるケズリ痕跡であろう。

59は、頭部以下で胴部上半の破片で、棒先による沈線で葉脈状文的に施文しているかのように沈線が破片下で接近してきている。74は、2本の平行沈線だけがめぐらしている口縁部破片である。85は、小さな円形刺突を施す口縁部破片で、口唇部にも同様な円形刺突を施している。87は、工字状文区画内に円形刺突を施す例であるが、穴は小さく3個一列に並んでいるように見え、もしかすると串状具を用いているかも知れない。89・90は、同一個体の可能性がある。91は、口徑の大きな半さい竹管による文業が施文されている。93は、無文地の内外面共に磨かれている土器で、焼成前の穴があけられている。穴は、波頂部と思われる下に一個とさらにその下位で、上位の穴に対応するように二側あけられている。上位の穴は、約1cmの正円で内面からあけられている。下位の穴は、幅約1cmで内面から細長くあけられているが破片であるため穴の形状は不明である。また、器形も浅鉢に小突起がつくのは判明しているが、ゆるく大きな波頂部に小突起がつくのか、平縁であるかは不明である。94・97・98は、波状になる口縁部破片で、94は口縁端部内面に「c」字状の爪形文を施文しており、波頂部が内面に少し押されている。

97は、口縁部外面に三角形の連続刺突を三列めぐらし、波頂部内面の上位中央に一個の円形刺突を施している。98は、波頂部中央部に焼成前の大きな穴が一個あけら、内面ではその穴を開むように1本の沈線をめぐらし、波頂部頂点付近に円形刺突が沈線の外側に2個おされている。101は、工字状文風区画内をへら先で縦の細い平行沈線でうめる。工字状文風区画間を縦の短い沈線を1本引いている。内面には指頭による円形の窪みを1個つけ、その上半を降

帶で囲んでいる。

全体の器形が判明しているものはないが、頭部からゆるく外反する深鉢形の35・41・55などが多く、浅鉢形となるのは、81・89などであろう。

以上の土器群は、中期後半の串田新様式〔狩野1988〕と言われている一群に該当するものであるが、ここでは小破片が多いため串田新様式の分類（I～III式）にしたがって区別しなかった。ただ、葉脈状文・押印文とその施文部位や口縁部だけの特徴をまとめるとII式の土器破片が主体・中心となり大半を占め、次いでI式よりIII式の方が多いと思われる。中で、97は気泡式にあたる。

99～133（101を除く）は、繩文地と条痕文と上器底部の群である。119～121は、条痕文土器で、99～115・117・119・122～124は、繩文地の上器破片で、99～107は口縁部破片で、108～115は胴部破片で、他は底部破片である。122・124～129は底部破片で、底部外面に圧痕文様が残るもので124と129の底部外面には、硬質の草及びこう木科植物と思われる圧痕文様が残る。116などは、底部外面に植物の纖維などを用いて作った編物及び織物と思われる圧痕文様が残る。また、132などには、底部外面に落葉植物の葉の圧痕文様が残されている。130～132は、脚部破片で、133の底部から脚部への屈曲部に粘土紐を張り付け、さらにその上を指頭で押しつけて窪ませている。図示はしなかったが182は、有孔鋸付土器で、鋸部分の小破片であるため、一応ここで扱う。これらの時期は、中期後半の串田新様式の中で扱って良いと思われる。

繩文時代中期後半の土製品（第6図・図版8）

土製品は、全部で6点出土し、円盤状土製品4点・耳飾1点・土偶1点がある。出土区は、136以外は西地区である。

円盤状土製品 円盤状土製品は、4点出土し、図示したのは3点である。134と135は、条痕文で、136が繩文で、181は無文である。134は、直徑約3cmの円形で一番小さなものの、長軸上で打欠きに近い小さな窪みがあり、土器片鍾として利用している。136は、長さ7×幅5.5cmの小判形で形状などは134と同様である。他の2点は、大きさなどが134に近い円形である。

耳 飾 耳飾は、半分欠損し、西側遺物集中区出土で、細かい遺物が無いかどうかを確認するために、試験的に包含層を土壤水洗した時に検出したものである。144は、直徑約3cmの円形で、厚さ1.2cm、穴直徑約1cmの形状で、文葉はなく、外側が少し窪む。

土 偶 土偶145の1点は、同部から下半分の欠損品で頭部などを欠く。形状は、板状反り返り土偶と呼ばれるもので、足は外側に開く形で指が表現され、足からすぐに平坦な底面となっている。胴部は腹部が表現され、1本の筋筋で正中線とし、背面も含めて文葉などはない。底面を水平にした時、胴部から頭部は背面側へ少し反り返る形となる。

この他に、同時期のものと思われる粘土塊（186）、突起破片（183）などがある（図版第8）。これら土製品の時期は、中期後半とする。

繩文時代中期後半の石器（第7～11図・図版9・10）

石器の種類としては、打製石斧・磨製石斧・石錐・擦石・砥石・凹（叩き）石・剥片他がある。石器は、地区全休から出土し、まとまりはみられなかった。石器は、9割以上を圓化し、圓化しなかったのは小剝片などである（第3図）。

打製石斧 打製石斧は、25点出土し、完形品は9点ありうち1点は破片が接合し完形品となっている。この打製石斧は、石器の中で出土点数が一番多い。1・2は、刃部が幅広くなり擦形と呼ばれ、完形品である。1は、長さが約11cmの小形品で、2は長さが約20cmの大形品で、打製石斧中で最大である。この形の打製石斧は、破片を含めて2点のみである。3～25の23点は、胴部が少し円むものがあるものの刃部と基部の幅がほぼ一定で短冊形と呼ばれるもの

である。完形品は7点あり、他は破片で欠損状況などは第18図に示した。3～5は、長さが10cmの前後的小形品で、6～9は長さが15cmの前後の中形品である。7は、西側遺物集中区出土で、破片同士（基部側半分と刃部側半分）が隣接した区から出土し、接合し、基部の一部が少し欠損しているがほぼ完形品となったものである。15など4点は、側辺や基部を縫打（矢印で図化）しており、別群としなければならないのかもしれないがここでまとめた。打製石斧の石質は、全部が判明していないが、安山岩系・砂岩系の石が使用されている。大半の石斧は、自然面を残している。

磨製石斧 磨製石斧は、数少なく6点しか出土していない。完形品は1点であるが、刃部の一部を欠損している。刃部を欠損しているものの完形品に近い（4／5）ものが2点ある。31は、長さが約7cmの小形品で、丁寧な磨きがなされている。刃部近くでは、使用痕らしい擦痕がある。33は、刃部側半分が欠損し、32・34は刃部側の一部を欠損している。35は、未完成品らしく側辺と基部に敲打痕を残している。36は、基部側半分の欠損品で、折れてから基部と折れ口に敲打して磨ませて石錐に転用している。石錐とすれば、大形品となり重量は207gある。石質は、蛇紋岩系が多い。

石錐 石錐は、13個（36の転用品を含めず）あり、打製石斧に次いで多く出土している。形では、円形と長方形に近い小判形とを分け、それらにあてはまらない中間形の三分類とした（第18図表3）。また、糸掛けたとされる窪みの形状では、打欠き、筋をつける切目、打欠きと切目の両方が加わるもの、打欠き部分を磨くものに四分類となる。さらに36の転用品をここに入れると、敲打して磨ませるもののが加わり五分類となる。石錐として利用している石は、手頃な自然石を使い、長軸方向に糸を掛けるように打欠きなどをする例が多い。41～45は、小形品で約5cm、50g前後で、47・48は、大形品で約10×5cm、250g前後で、他は中形品である。48は、長軸・短軸両方向（十字）に糸掛けを作っており、49は小破片であるが、糸掛け部分を細い筋状に磨いて切目としている。50は、糸掛け部分の一端（図の上部）を打欠いた後切目とし、53も同様であるが両端でおこなっている。51は、糸掛け部分の一端（図の上部）を打欠いた後、打欠部分の広い範囲をみがいている。52は、糸掛け部分を打欠いた後縛打し、平坦面の両面に凹部分があり、凹石としても使用している。

擦石 擦石は、6点あり、61と62の2点が完形品で、他は欠損品である。形状では、長方形で分厚いものが使用されている。そして、長軸方向の側辺を使うため、当初のゆるやかな膨らみが平坦になっている。62などは叩石としても利用しているらしい。

砥石 砥石は、7点出土している。71と72は、砥面を持っているためここに含めた。叩き石や擦り石としても利用されていることや使用したと思われる筋状の砥面があり、当遺跡の73や他遺跡で多く出土している平坦な砥石と少し様相が異なり、なにをどのように磨いたかは現在不明である。筋状の砥面は、平坦な面の中央で長軸方向に一束ある。断面は、72は少し開く「V」字状で両面にある。71の場合は、半球形に近く現在の断面系が円形の鉛筆があてはまるような形状である。また、砥面として利用しているのは、溝だけではなく平坦面と側辺も使っている。73～77は、砂岩系の平坦な砥面を持つ砥石で、73は表裏二面を使い、74は破片であるためか面のあるところ全てを使い砥面としている。77は、周辺部に円形の凹が8個ある。75は、石皿としても良いのであろうがここでは砥石とした。この砥面は、少し凹み、丁寧に磨いたらしく砥面が「つるつる」の状態であった。

凹（叩き）石 凹（叩き）石は、81～94で、14点あり、凹石と叩き石とを区別することが出来ないため一括して扱った。形状では、81の小形品から88の大形品まであるが、いずれも手で持つ事が可能な大きさである。

凹は、一面と両面にあるものとに分けられ、凹面では1個、2個一列、複数が一列になるものがある。形では円形長方形、台形、三角形などがある。叩いている部位では、一定していないが、長軸方向の一端もしくは両端例が多い断面では偏平から少し膨らむ位が多く88などが厚く約6cmを測る。これらの凹と叩きが組合わさったものが多い。93と94は、門をもたず、叩き石である。

剝片他 剥片などは、少しあるが、大半が加工痕などがみられないため2点のみ図化して扱った。101と102は剝片を利用した楔形石器である。これら石器の時期は、土製品同様中期後半とする。

縄文時代後期以後の土器

後期以後の土器は、わずかあり、137・138は中期後半かもしれないがここであつた。137は、口縁部破片であるが突起が付いていたかはがれています。139は、口縁部が内湾し、平行沈線をもつ。140と141は、口唇部に縄文を押圧している。143は、縄文地の口縁に平行沈線と沈線による文様をいれている。44は、平行沈線間に刺突を施し、胸部を縄文地としている。これらの土器は、後期後半とする。

(2) 遺構

石群 (第20図・図版5・6)

縄文時代の遺構としては、調査区中程で検出された石集中区がある。縄文時代の遺物包含層は、第2層で黒褐色粘質土であり、調査区中央部では特に厚く平均して40cm前後であった。その中程で石が集中して検出されたので、図化と写真などの記録作業を行った(第17図)。この石集中区は、遺構として良いかの判断が難しいが、他地域では検出されなかったのでここでは遺構としておく。出土状況では、石のまとまりや重なりなど特に注目されるような状況でなく、また、炉跡も確認できなかった。この石群の中には石器と土器が少し含まれたが石同様まとまりなどはなかった。これらの石は、小さな剝片火から人頭大の大きさのものまであり、自然石と割れた石が混在していたこのような状況であるため一応ここでは、石と遺物が一定地区に集中した石群(集中区)とする。

2. 弥生時代以降 (第6図・図版8)

弥生時代以降の遺物は、弥生時代の土器、古墳時代の土師器・鐵製品、中・近世の土器などがある。

(1) 遺物

弥生時代の土器 弥生時代の土器としては、201・202・207の壺形土器の口縁部破片などがある。口縁部外面には、煤が付着し、口唇部外面には縦の連続した刻みがめぐり、内面には串状具による斜めの連続して押圧されたような圧痕文が二段めぐる。その他の文様などは、風化が激しく不明である。207は、別個体と思われ、壺胴部破片で、外面に煤と刷毛目痕がみられる。以上の土器は、小破片であることと風化により特徴が一部しか判明していないことから時期を決めていくが、後期前半としておく。

古墳時代の土器 古墳時代の土器として土師器がある。203は、高杯形土器脚部破片と思われるが、円形の穴と思われる疑似口縁状部分があるが、穴とすると直径がかなりおおきくなり現段階ではそれが判らないため、器形も含めて不明である。204・205は、円形された壺形土器剥離部破片である。206は、壺形土器底部破片らしい。また、同時期と推定される小破片が2点ある。他に鐵製品があり、所属時期は決定できないものの同様の遺物が過去の調査で出土しているためここで210を扱う。錯落としなどをしていないため正確な形状は明らかでないがおそらく昭和55年調査時出土の鍬先状鐵製品と同じであろう(中山1981)。これらの土器の特徴から前期の初めとしておく。

中・近世の土器 中・近世の土器として251・211~244などがある。251は、中世土師器で非ロクロ成形の破片である。他に瀬戸系の碗や擂り鉢・染め付けの皿や碗などの小破片がある。

3. 遺構 (第19図)

遺構は、調査区の東端で少なく、中央部から西地区にかけて穴・土坑・溝が検出されている。遺構内出土の遺物は近世以降(現代?)の土坑出土の縄文土器2点である。

穴 穴としたものは、平底形が円形で、直径と深さが20~30cm前後で、柱穴状のものである。穴は、調査区の西地区から中央部にかけて存在する。東地区北側で一列に並ぶ穴は、隣の畠から伸びる果樹の支柱跡で、現代の穴である。穴から出土した遺物はなく、また、集中したり、並ぶ穴もみられない。

土坑 今回の調査で上坑としたものは、平面形が不整形で、大きく（1×1m以上）浅い穴でこれまで風倒木痕と呼ばれているものと、方形で一边が1m以上（調査区外へ伸びるため規模不明確）、深さ50cm程の穴をさす。土坑は、調査区西地区南端に2箇所あり、いずれも調査区外（串田新遺跡公園斜面）へ伸びていたため、遺構掘削は北側ほぼ半分とし、先掘しなかった。遺構覆土は、柔らかく、龜大前後の石が大量に入っていたり、他の遺構と比べて最近埋められたような状況であるため、構築時期は決定できないものの近世以降（現代？）と推定される。土坑SKからは、縄文時代土器破片2点が出土したが、検出時の様子から土器は混入品であり、遺構に伴うものではない。

風倒木痕状の穴は、調査区東・中央部・西地区にそれぞれあり、西地区の穴は3個が一箇所に重複してかたまっている。形状は、円形を基本とする不整形で、浅い皿状の断面形を呈し、中央部に上層の黒色土が入る。切り合っている穴は、ほぼ同時期らしく上面での切り合いは不明である。

溝 溝状の遺構は、調査区中央部地区で、風倒木痕状の穴に接するようにあり、調査区内から調査区外の北側へ伸びて行く。最大幅は、80cm、深さ40cmである。これら遺構の所属時代は、伴出遺物がないため、時期不明としておく。

遺物	先土器時代	右羽 貢岩
縄文時代	縄文時代前期 中期初頭木目状然系文 中期前葉新崎式 中期中葉人神山B式 古苦式 中期後葉申川新式 直 後期初頭氣屋式 後期中葉加曾利B1式 晩期浅鉢 有孔鉢付 壺 器台 盖 土偶 土鍤 土版 耳飾 牙製石斧 打製石斧 石核 粒石 石鍤 石匙 凹石 峰窓石 石包丁様石器 石剣 砥石 粗製石器 不明石器 玉 右鍤 四石 摩石 剥片 石皿 廉石 故石 彫刻石棒	
弥生時代	土器 陶製石斧（有柄）	
古墳時代	古式土師器 壺 壺 台付長頭蓋 長頭蓋 小形壺 台付壺 高杯 器台 盖 鉢 鍤先	
丘陵西地区	石組遺構 焼土 縄文時代竪穴住居跡2 石組炉5（方形4） 古墳時代住居跡1	
丘陵中央地区	円墳5基（現在円墳3基 2基消滅） 古墳時代住居跡5（炭化物や玉材料等出土） 方形周溝墓状溝確認	

表1 串田新遺跡遺構・遺物一覧表（昭和24年～57年度分）

調査年度	調査・事業主体	備考
昭和24～25年	小杉高等学校地歴班調査	
昭和46年夏	大門町教育委員会調査	
昭和47年度	富山県教育委員会調査	
昭和51年9月	大門町	国指定史跡1973年
昭和52年12月	大門町	串田新遺跡環境整備基本計画策定委員会（株式会社丹青社）
昭和52年度	大門町	1977『串田新遺跡環境整備基本計画』
昭和53年～57年度	大門町	第1次計画）国指定地 国県補助金で環境整備事業開始
昭和55年3月	大門町教育委員会調査	丘陵中央部から東側北東地区（第2次計画区）範囲確認調査
昭和55年10月	大門町教育委員会調査	環境整備に伴う便所建設予定地に伴う調査 丘陵西側南
昭和56年10月	大門町教育委員会調査	環境整備に伴う見晴台建設予定地に伴う調査 丘陵西側北
昭和57年度	大門町	第1次計画区整備完了
昭和57年～60年度	大門町	第2・3次計画区 未指定地（北東地区）環境整備事業開始
昭和60年度	大門町	第2・3次計画区整備完了

表2 串田新遺跡調査他一覧表（昭和24年～60年度分）



第3図 遺物出土状況図（遺構約1/800、遺物約1/6）

III. 調査の成果

(1) 過去の調査結果

ここでは、串田新遺跡の昭和24年から56年までの調査結果などと今回調査結果と見比べることとする。また、調査結果などの詳細は刊行済みの各報告書並びに本書収録の調査結果一覧を参照願いたい。

昭和24～25年小杉高等学校地盤班の調査

昭和24～25年にかけての小杉高等学校地盤班の調査は、昭和24年4月に橋田小学校に遺物があることを聞き実際に小学校と現地を見に行ったことから始まる。そして、地盤班員は、5月に下見をし、6月と7月に2回の発掘と測量をし、さらに昭和25年5月には3回目の調査を行なっている。調査結果として以下の事が記されている。

遺跡範囲は、丘陵上の西南部で台地の約1/3の範囲(150×150m)である。遺物は、丘陵上より西斜面に多く、丘陵東北部は、弥生か土師が採集され、前述の二地点間に円墳5基がある。また、丘陵最東北端の神社境内でも弥生か土師器が採集される。調査面積は、1回目7.5m²、2回目4m²、3回目4.8m²で合計すると16.3m²である。遺物は、出土状況などをまとめさらに土器を9分類している。他に土製品や石器などが出土している。

昭和46・47年度富山県及び大門町教育委員会の調査

昭和46・47年の調査は、昭和45年に丘陵の土取りが計画されたため、それに対処するために急きょ昭和46年夏に大門町教育委員会が調査を行った。しかし、その調査体制や規模が少なかったため、再度、昭和47年に富山県教育委員会が調査したものである。

昭和46年度 調査結果は、遺構では石組遺構・焼土など、遺物では縄文時代前期から晩期の土器・石器(石斧・玉他)・土製品・弥生時代土器・土師器などを検出している。

昭和47年度 調査結果は、以下の通りである。遺跡の範囲は、丘陵西側が中心で、丘陵中央から北側に円墳3基があり、それを北から第1～3号墳と呼ぶ。昭和24年の調査では、円墳5基があることになっているが、図面を対比すると最北端の2基がなくなっている。遺構では、丘陵西側の中央平坦部で縄文時代の堅穴住居跡2棟・石組炉6基・穴4箇所を検出している。他に古墳時代の堅穴住居跡1棟を検出し、第1・2号墳調査を行っている。第1号墳は、墳頂部が盗掘されており、穴と周溝を確認し、第2号墳の周溝は段をもち方形に巡るらしい。古墳からは古式土師器を出土し、さらに古式土器の包含層に構築されている。

遺物では、縄文時代の土器・土製品・石器がある。古墳時代では、古式土師器(壺・甕・釜など)がある。

昭和55～56年度大門町教育委員会の調査

昭和55年度の調査は、大門町教育委員会が採用した専門職員が行なった調査であり、これ以降の調査は環境整備に伴う調査である。調査は昭和55年3月に串田新遺跡の丘陵中央部から東側北東地区(第2次計画区:橋田神社側)で実施されたもので、遺跡の東側への広がりを把握するための範囲確認調査である。調査地区は、北側を第1地区、南側を第2地区として行われた。第1地区の調査結果は、遺構は検出されず、遺物としては縄文時代土器・剥片と古式土師器が出土している。第2地区では、古墳時代初頭の住居跡5棟が検出され、古式土器の他に植物種子を含む炭化物や玉材料・碧玉質緑色凝灰岩破片・炭化物などが確認されている。また、方形周溝墓状の溝も確認されており古墳以外の墳墓の存在を示した。遺物では、縄文時代土器などと先土器時代貝岩製の石刃(単独出土)がある。

過去の調査結果などと今回調査結果とを合わせてまとめており、以下である。串田新遺跡は、方形周溝墓を含む古墳群が大沢山東地区にあり、縄文時代と古墳時代の住居跡群は古墳群を挟んで東西2群として存在する墳墓と集落遺跡であることが判明した。

昭和55年度大門町教育委員会の調査

調査は、環境整備に伴う便所棟建設予定地に伴う調査として昭和55年10月に丘陵西地区南で実施され、当初第1地区で建設予定であったが遺構などが検出されたため、第2地区に変更した。第1地区的調査の結果、遺構は住居跡1棟・溝状遺構1・土坑1が、遺物では古式土器と鉄製品が検出された。溝状遺構は、方形周溝墓の可能性があり、遺物では古式土器の甕・高杯・器台・鉢と鉄製品で鍔先が出土している。第2地区は、遺構・遺物がほとんど無いため便所棟を建設することになった。

昭和56年度大門町教育委員会の調査

昭和56年10月の調査は、環境整備に伴う見晴らし台建設に先立つ調査として、丘陵西地区北で行われた。遺物では、縄文時代中期から後期前葉までの土器や石器が出土している。

これまでの遺構と遺物などをまとめると以下表1・2のようになる。

(2) 今年度調査結果との比較

今年度の調査の結果では、縄文時代中期と後期の土器・土製品・石器と石群、弥生時代の土器・古墳時代の土器・鉄製品、中・近世の土器と所属時期不明の遺構があり、これらとの比較を行ながら時期などをみていく。

縄文時代の土器では、これまでに前期から晩期までの土器が出上り、今回調査では特に中期後半の串田新式期の土器が多量に出ており、史跡地区と同様の内容と言える。土製品のなかで串田新式期の土偶とされる板状反り返り形が出土した事は、土器と同内容と言える。また、当遺跡で円盤状土製品としたものは、一部に糸掛け状の打ち欠きをもつものがあり、土鍤といえるもので過去の調査出土の土鍤に似ており、土製品は過去の調査内容と一致するものである。石器では、打製石斧・磨製石斧・石錐・擦石・砥石・凹（印き）石・剣片の7種類があり、これらは全てこれまでに出ているものである。注目されるのは、今回の調査で初めて出土し、本省では砾石としたなかで、〔筋状の円があり、その断面が少し開く「V」字状や半球形で円形の船竿などがあつてはまるような〕形状品2点である。現段階では、用途などは不明である。今後類例を探していくたい。凹（印き）石などは、單一の用途で使用されたのではなく、複数の使用方法があったらしい。弥生時代以後の遺物は、出土数が少ないながらもこれまでと同一内容である。

これらの事柄をまとめると以下のようになる。今回の調査の結果は、過去の調査で判明している内容と一致するため、史跡地区と同様に生活していた人々の活動内容を確認したと言える。今回調査区内に遺物などを残した人々が史跡地区に生活していた人々と広い意味では同一集団として良いであろう。しかし、今回調査区の西地区西端では少ないながらも遺物が出土しており、史跡地区（大沢山）斜面裾部までは50mも離れており、史跡地区にいた人々がそこまでわざわざ捨てて来たかは疑問である。それよりも、史跡地区に生活していた人々と下方（史跡地区下）で今回調査区の周辺に狭い意味での別集団が同時に生活し、広い意味での同一集団として生活していたとみる。ところがこの事は、今回の調査が狭い範囲しか調査していないため、今後の周辺での調査がなされた時でなければ結論を出す事は出来ないと思われる。そこでここでは、史跡地区に生活していた人々が今回調査区側（下方）へ遺物を廃棄したかどうかとなると不明であるとする。また、遺跡の広がりについては、今回の調査の結果により、大沢山北側については、これまで推定されているより広く、北側に伸びるものと結論づけられる。

最後に串田新遺跡全体（史跡地区と今回調査区を含む）をまとめると、以下のようになる。

1. 遺跡の範囲は、現在推定地より広くなり、橋田神社を含む大沢山一帯と今回調査区を含む周辺地となる。
2. 遺跡の時代は、先土器時代・縄文時代（前期・中期・後期・晩期）、弥生時代・古墳時代、中・近世である。
3. 遺跡の種類は、先土器時代：遺物散布地、縄文時代：遺物散布地・集落、弥生時代：遺物散布地、古墳時代：遺物散布地・集落・墓（古墳・周溝墓？）、工房？、中・近世：遺物散布地である。

最後に、調査並びに遺物及び資料整理と報告書作成などにご協力くださいました方々に謝意を表します。

IV. 参考文献

1. 串田新遺跡関係

- 昭和27年 富山懸立小杉高等学校地歴班 1952 「富山懸立水部施田村字串田新 串田新遺跡調査報告書」
- 昭和47年 大門町教育委員会 1972 「串田新遺跡 大門町串田新遺跡緊急発掘調査報告書」
- 昭和48年 橋本 正・神保孝造 1973 「富山県大門町 串田新遺跡 発掘調査概報」 富山県教育委員会
- 昭和52年 大門町 1977 「串田新遺跡環境整備 基本計画」
- 昭和56年 中山修宏 1981A 「大門町埋蔵文化財調査報告第2集 富山県大門町 串田新遺跡II 北東地区の範囲 確認調査」 大門町教育委員会
- 昭和56年 中山修宏 1981B 「大門町埋蔵文化財調査報告第3集 串田新遺跡III 昭和55年度環境整備に伴う調査」 大門町教育委員会
- 昭和57年 高橋修宏 1982 「大門町埋蔵文化財調査報告第4集 富山県大門町 串田新遺跡IV 昭和56年環境整備に伴う試掘調査」 大門町教育委員会
- 昭和58年 大門町教育委員会 1983 「串田新遺跡・整備事業概要」

2. 本文関係

- 富山県 1976 「富山県史 通史編I 原始・古代」
- 富山県 1972 「富山県史 考古編」
- 富山県埋蔵文化財センター 1994 「富山県埋蔵文化財包藏地地図」
- 大門町 1981 「大門町史」
- 小島俊彰 1964 「高岡公園小竹森縄文遺跡」 高岡市教育委員会
- 小島俊彰 1972 「縄文時代中期」 「富山県史 考古編」
- 小島俊彰 1974 「北陸の縄文時代中期の編年一戦後研究史と現状」 「大境第5号」 富山考古学会
- 高掘勝喜 1955 「先史文化」 九学会編『能登』所収
- 高掘勝喜 1965 「縄文文化の発展と地域性—北陸—」 「日本の考古学II」
- 狩野 陸・島田修一 1988 「富山県大山町花切遺跡発掘調査概要」 大山町教育委員会
- 狩野 陸 1988 「串田新・大杉谷式土器様式」 「縄文土器大観3中期II」 所収
- 橋本正他 1978 「富山県立山町二ツ塚遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 柳井瞳他 1976 「富山県立山町岩崎野遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 加藤三千雄 1986 「第12群土器 串田新式期・字出津式期」 「真脇遺跡」 能都町教育委員会
- 木下哲夫 1985 「大杉谷式小考」 「古代探査II」 早稲田大学出版部
- 高掘勝喜 1986 「北陸の縄文土器編年」 「真脇遺跡」 能都町教育委員会
- 斎藤 隆 1981 「北代遺跡と吉田文俊」 「富山市考古資料館報No.5」 富山市考古資料館
- 渕 景 1951 「富山県内新石器時代遺跡概観」 大境第1号

表

•

図

版

打製石斧計測表

番号	出土区	大きさ cm			重量 g	形状
		X	Y	長 幅 厚		
1	32	6	5.5	4.8 1.4	50.6	1/3刃
2	31	7	7.8	5.4 2.1	106.0	1/2刃
3	29	6	10.8	4.9 1.8	130.0	1/2は完形
4	44	4	6.8	4.5 1.4	52.3	1/2刃
5	41	5	6.0	4.0 1.3	40.1	1/2刃
6	36	4	7.2	4.8 2.9	142.0	1/2頭
7	43	4	10.3	5.0 3.2	223.0	1/2刃
8	45	4	9.6	5.1 1.5	88.3	4/5頭
9	32	6	16.0	8.3 3.0	507.0	4/5刃・接合

35 5

番号	出土区	大きさ cm			重量 g	形状
		X	Y	長 幅 厚		
10	45	4	19.4	11.5 3.3	803.0	完形
11	45	6	15.7	8.3 3.3	602.0	完形
12	38	5	13.0	7.7 3.5	350.0	完形
13	表採		11.1	7.2 3.1	377.0	1/2刃
14	41	5	8.2	6.8 2.9	185.0	1/2刃
15	29	8	13.4	6.2 3.6	358.0	完形
16	37	5	9.5	4.4 2.5	92.0	完形
17	39	8	7.3	5.1 2.6	138.0	1/3頭
18	40	5	10.6	4.9 3.6	248.0	1/2刃
19	表採		10.7	7.0 2.8	186.0	4/5頭
20	32	6	7.3	5.5 2.3	118.0	1/2頭
21	34	7	9.6	4.8 1.5	72.2	4/5刃
22	表採		6.7	5.4 2.3	92.1	1/2刃
23	40	3	11.5	5.1 2.3	155.0	完形
24	40	3	9.2	6.0 2.0	160.0	1/2刃
25	表採		8.7	6.4 2.9	171.0	1/2刃

表中、頭は頭部の方を、刃は刃部の方を、完形は全体がある例をさす。

擦石計測表

番号	出土区	大きさ cm			重量 g	形状
		X	Y	長 幅 厚		
61	38	5	7.7	7.0 5.6	358.0	
62	26	10	9.2	8.5 4.1	491.0	
63	41	4	10.5	8.1 5.1	651.0	
64	31	6	13.1	8.3 6.0	937.0	
65	表採		9.3	9.3 4.0	517.0	
66	表採		13.0	6.2 5.0	546.0	

石鎚計測表

番号	出土区	大きさ cm			重量 g	形状
		X	Y	長 幅 厚		
41	28	8	5.8	5.6 1.8	67.0	打欠 中間
42	34	7	5.5	5.0 1.6	53.0	打欠 円形
43	33	7	5.7	5.9 1.5	60.0	打欠 円形
44	42	4	10.2	6.8 2.8	227.0	打欠 小判形
45	39	4	8.9	8.4 2.8	282.0	打欠 円形
46	42	4	5.7	4.3 1.5	36.7	打欠 中間
47	36	5	9.4	6.9 2.5	209.0	打欠 小判形
48	35	7	8.5	7.6 2.4	138.0	打欠 中間
49	38	6	4.9	4.6 2.3	72.1	打欠 中間
50	表採		7.4	7.0 3.0	204.0	打欠 円形
51	43	4	4.9	3.9 0.7	12.5	切目 不明
52	40	4	6.2	5.2 2.0	83.0	打欠と切目 中間
53	表採		9.5	6.0 3.1	210.0	打欠と切目 輪推定 小判形

磨製石斧計測表

番号	出土区	大きさ cm			重量 g
		X	Y	長 幅 厚	
31	39	6	5.7	4.9 2.4	112.0
32	35	5	10.7	4.9 2.0	137.0
33	40	5	6.4	3.6 1.1	50.0
34	32	5	10.7	6.6 2.5	292.0
35	27	8	13.8	6.2 2.9	380.0
36	39	3	7.2	7.2 2.5	207.0

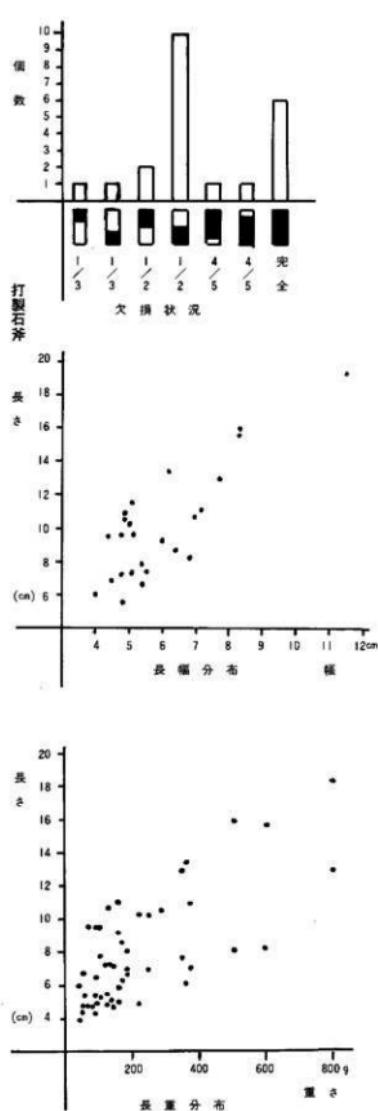
石器(剝片)計測表

番号	出土区	大きさ cm			重量 g
		X	Y	長 幅 厚	
11	36	6	3.6	2.0 0.7	5.1
12	37	6	2.4	1.5 0.4	1.6

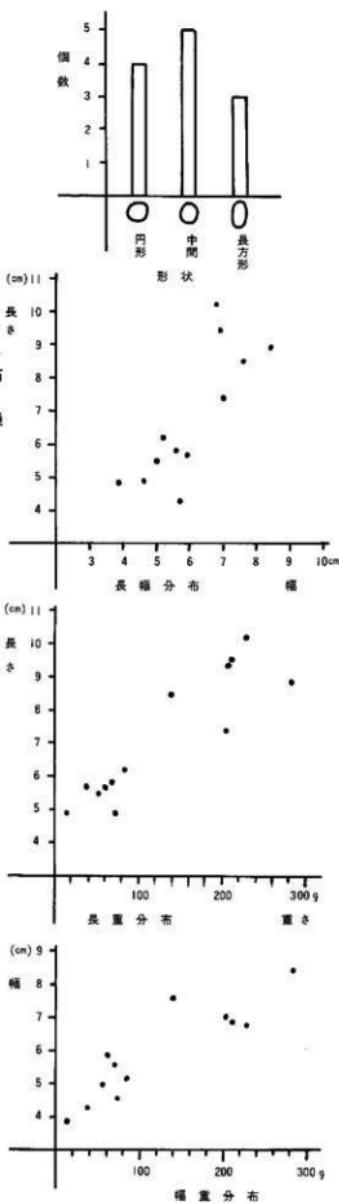
石皿計測表

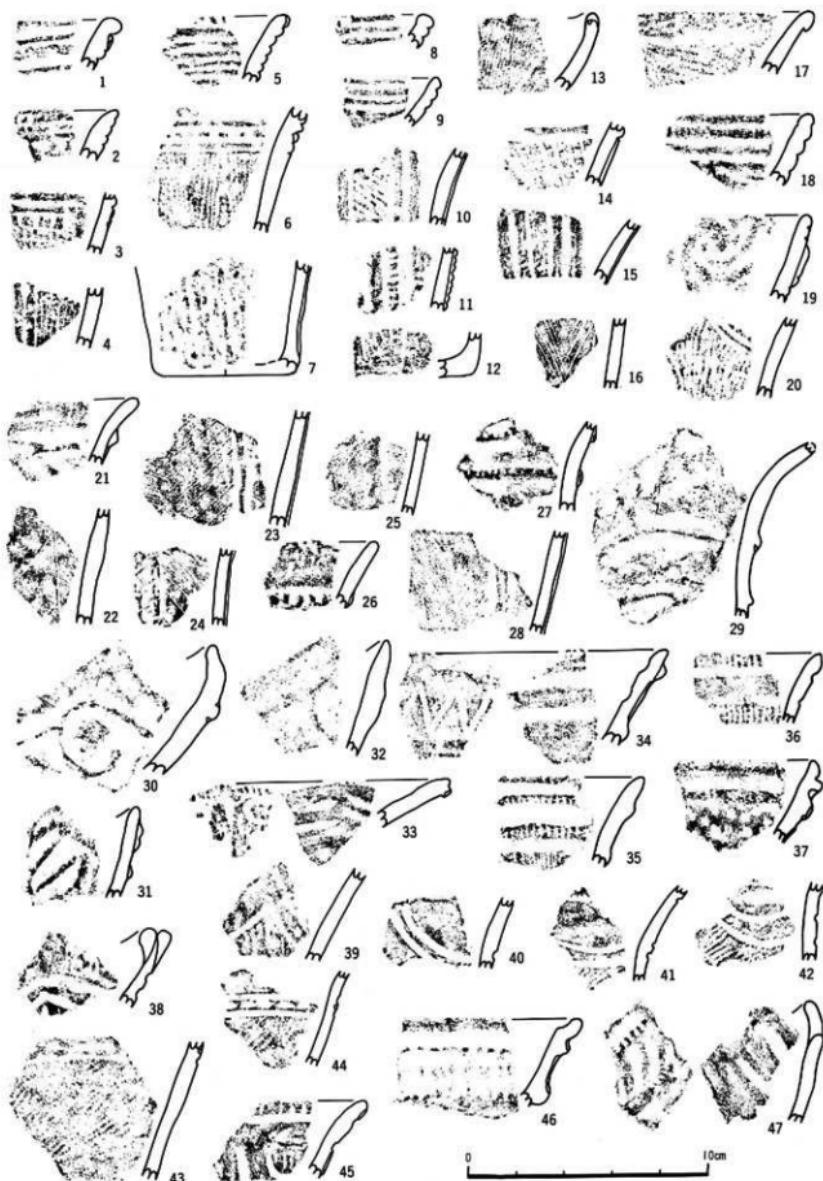
番号	出土区	大きさ cm			重量 g
		X	Y	長 幅 厚	
77	45	5	15.0	15.8 5.2	1450.0
76	37	4	15.0	11.8 4.8	1150.0
73	41	4	10.1	8.2 6.8	431.0
75	43	5	21.6	9.5 10.5	2840.0

表3 石器計測表

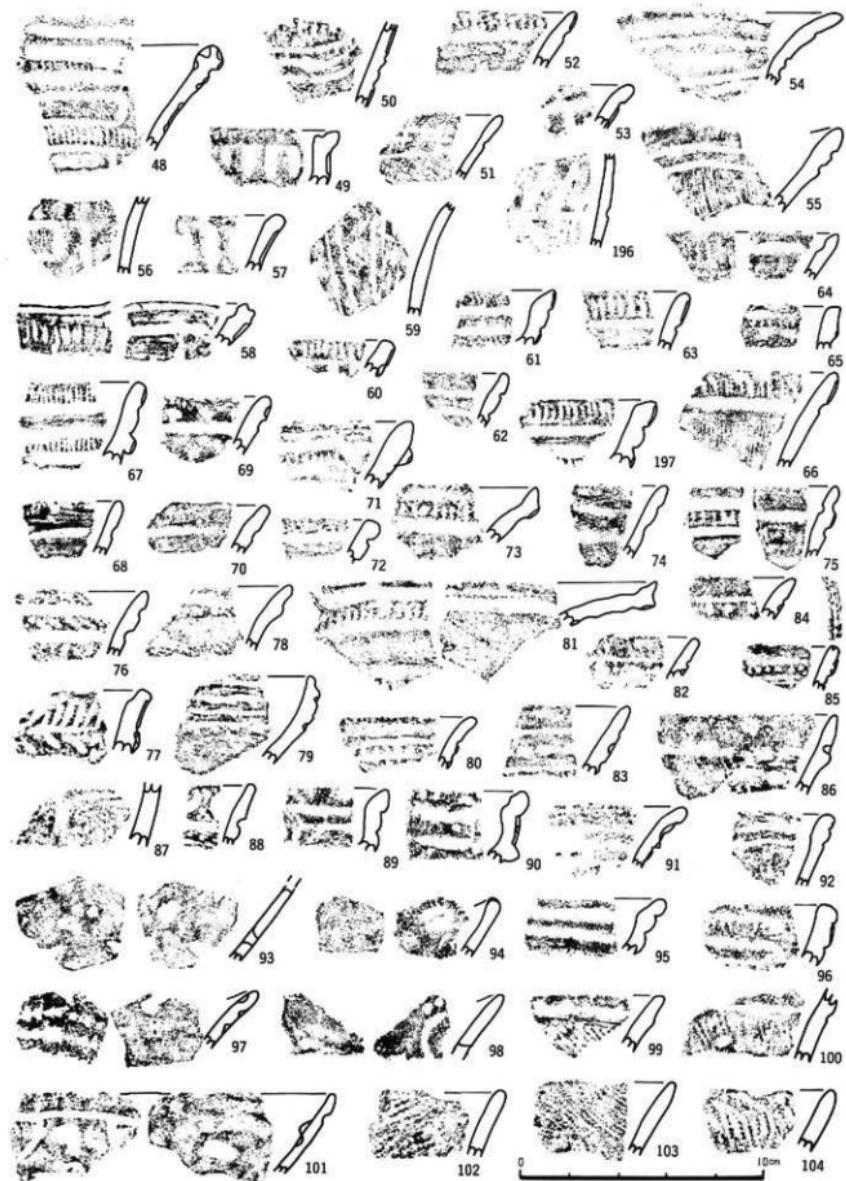


第18図 打製石斧・石錐形状分布

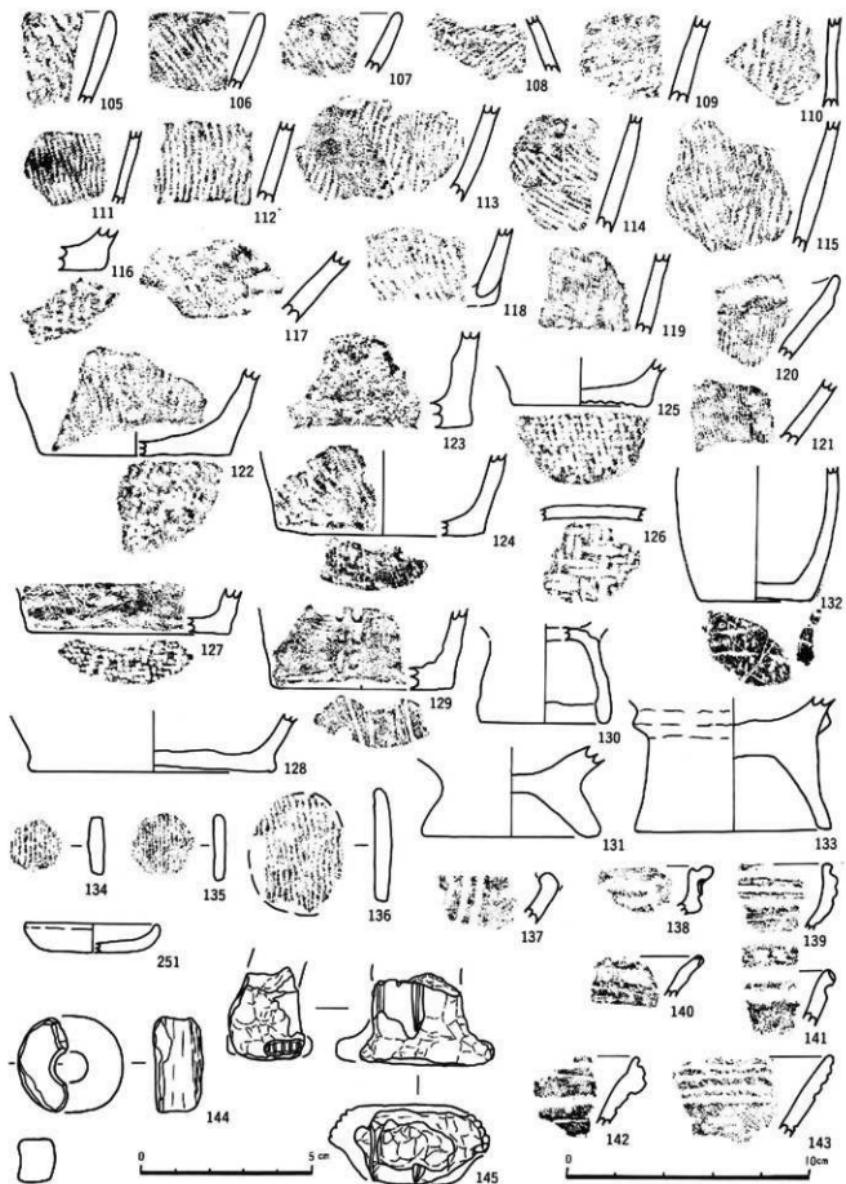




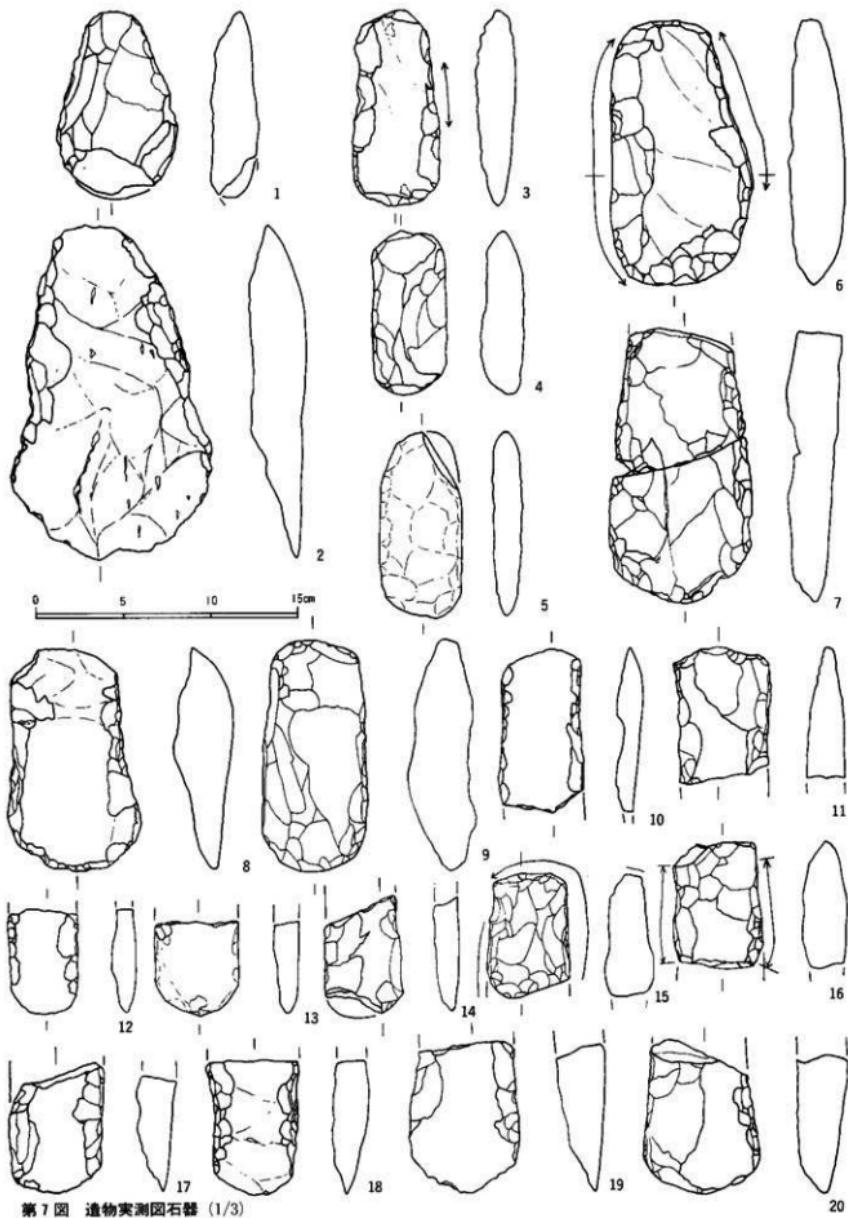
第4図 遺物実測図土器 (1/3)



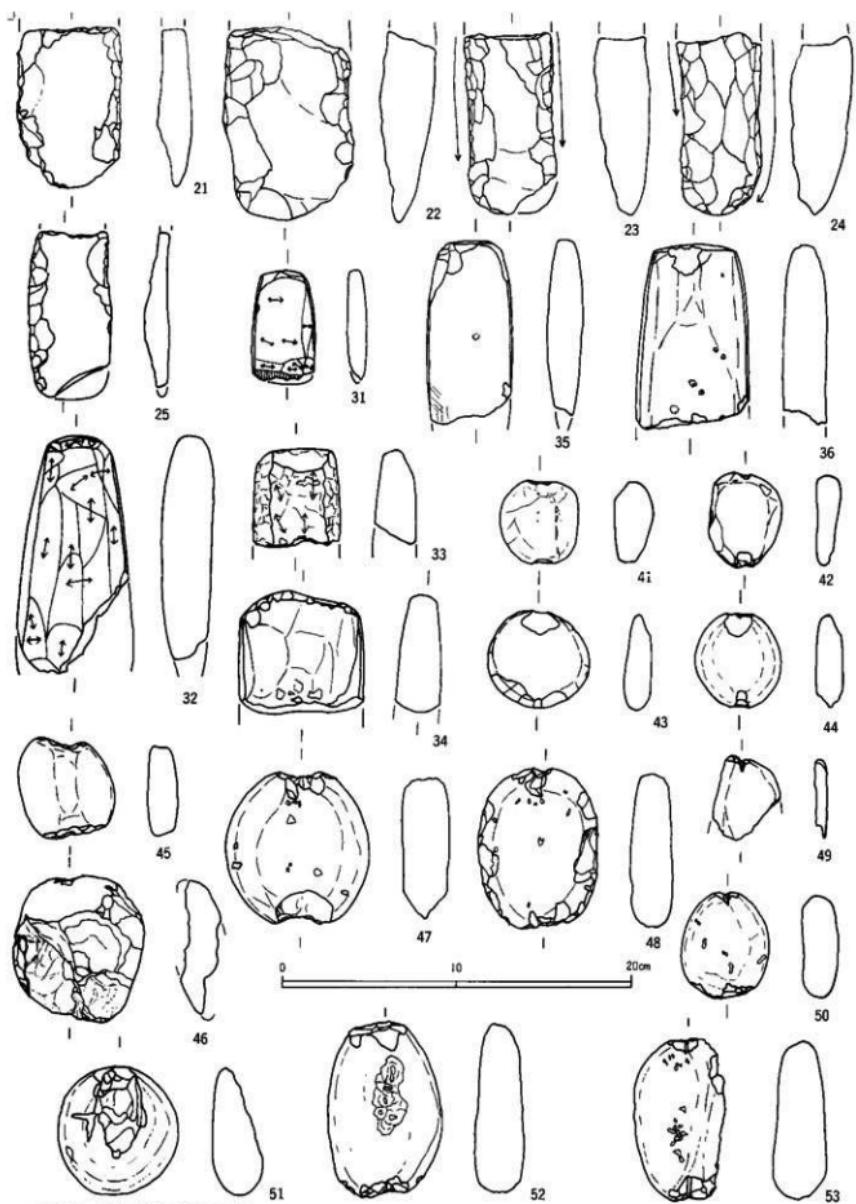
第5図 遺物実測図土器 (1/3)



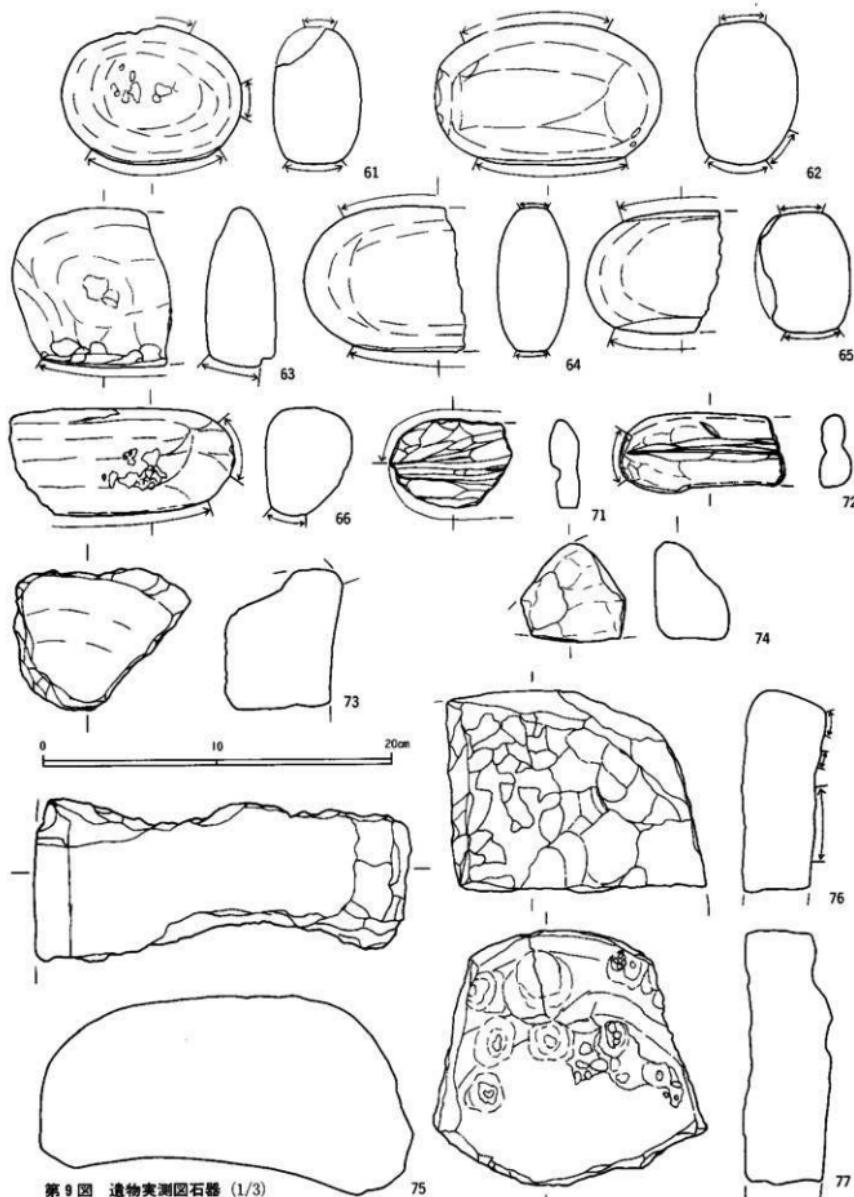
第6図 遺物実測図土器土製品 (1/3) 144・145 (2/3)



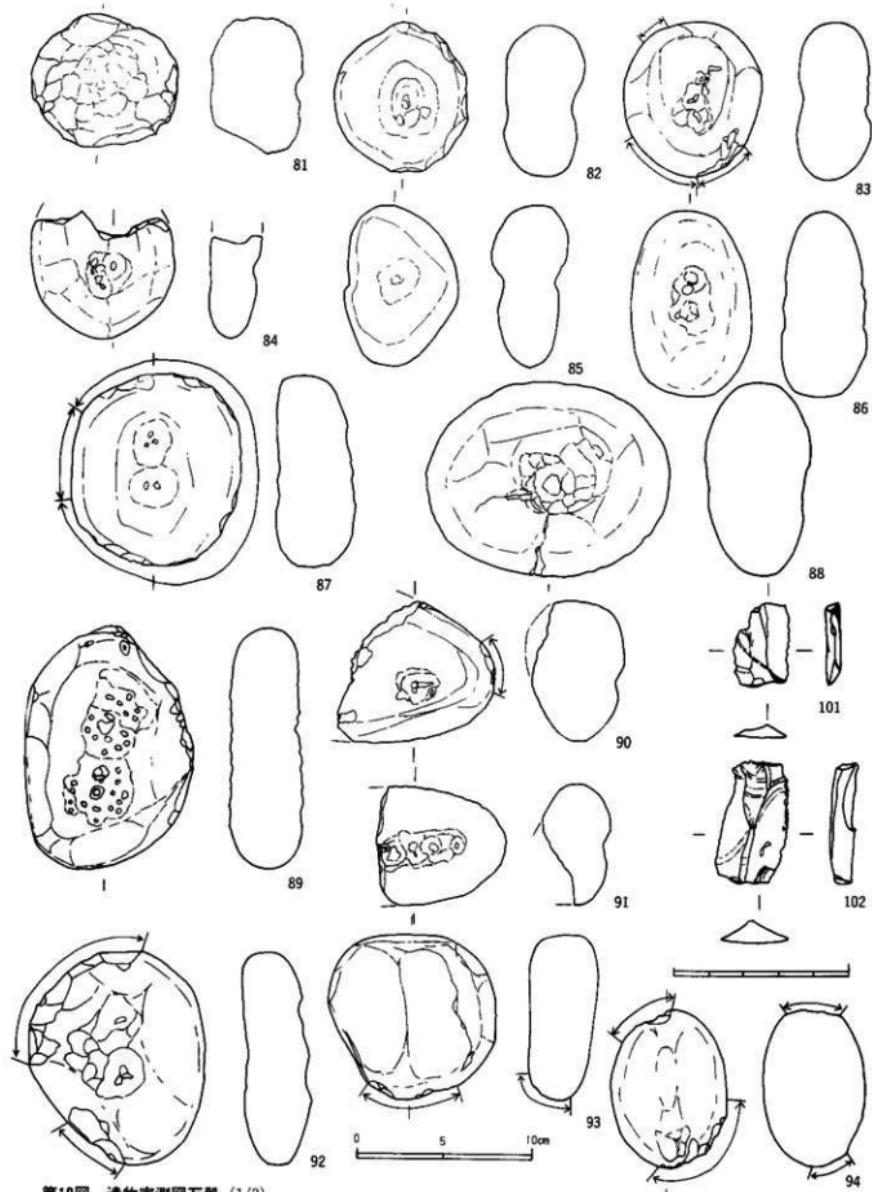
第7図 造物実測図石器 (1/3)



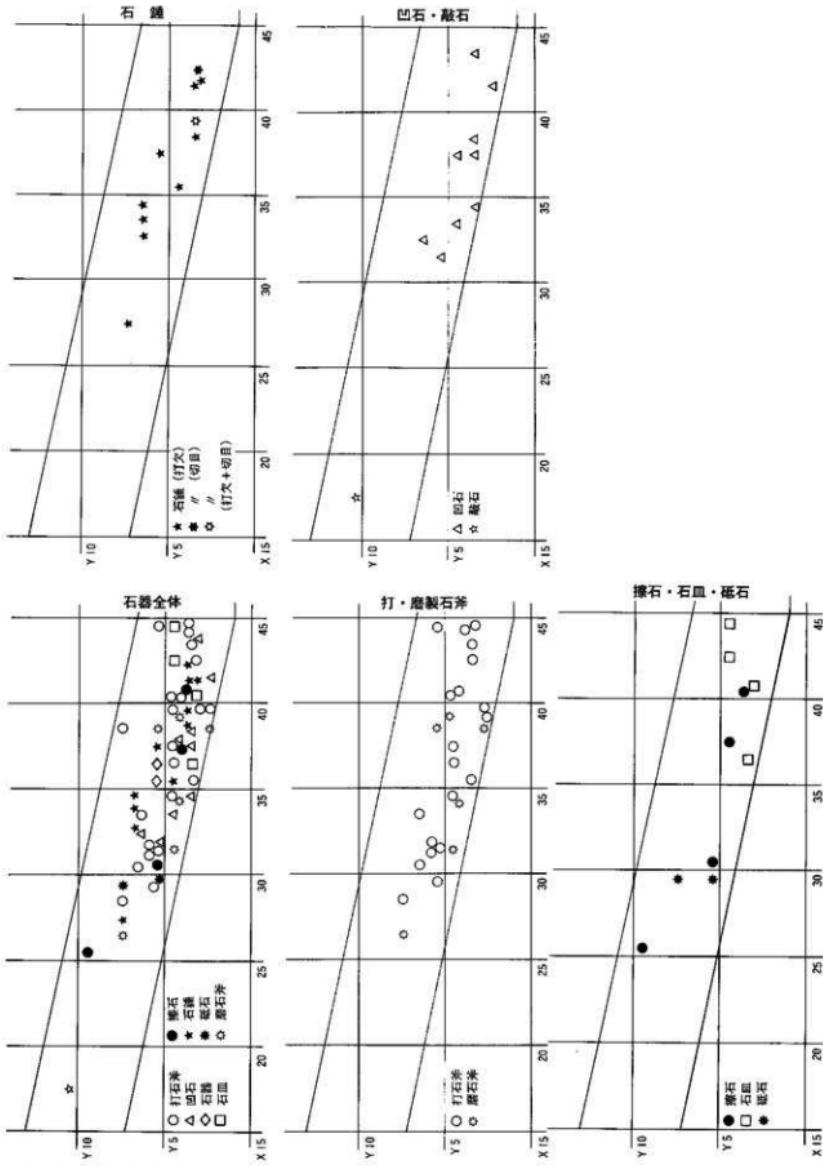
第8図 遺物実測図石器 (1/3)



第9図 遺物実測図石器 (1/3)



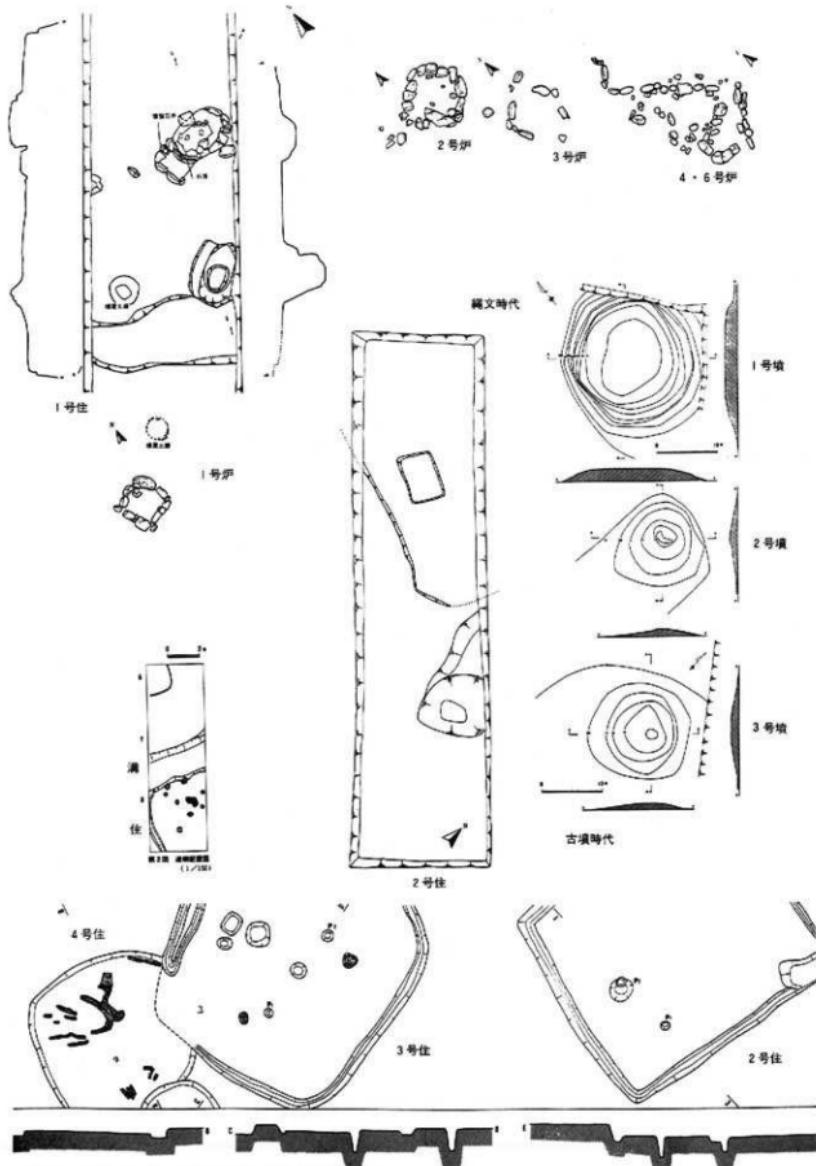
第10図 遺物実測図石器 (1/3)



第11図 出土石器位置図



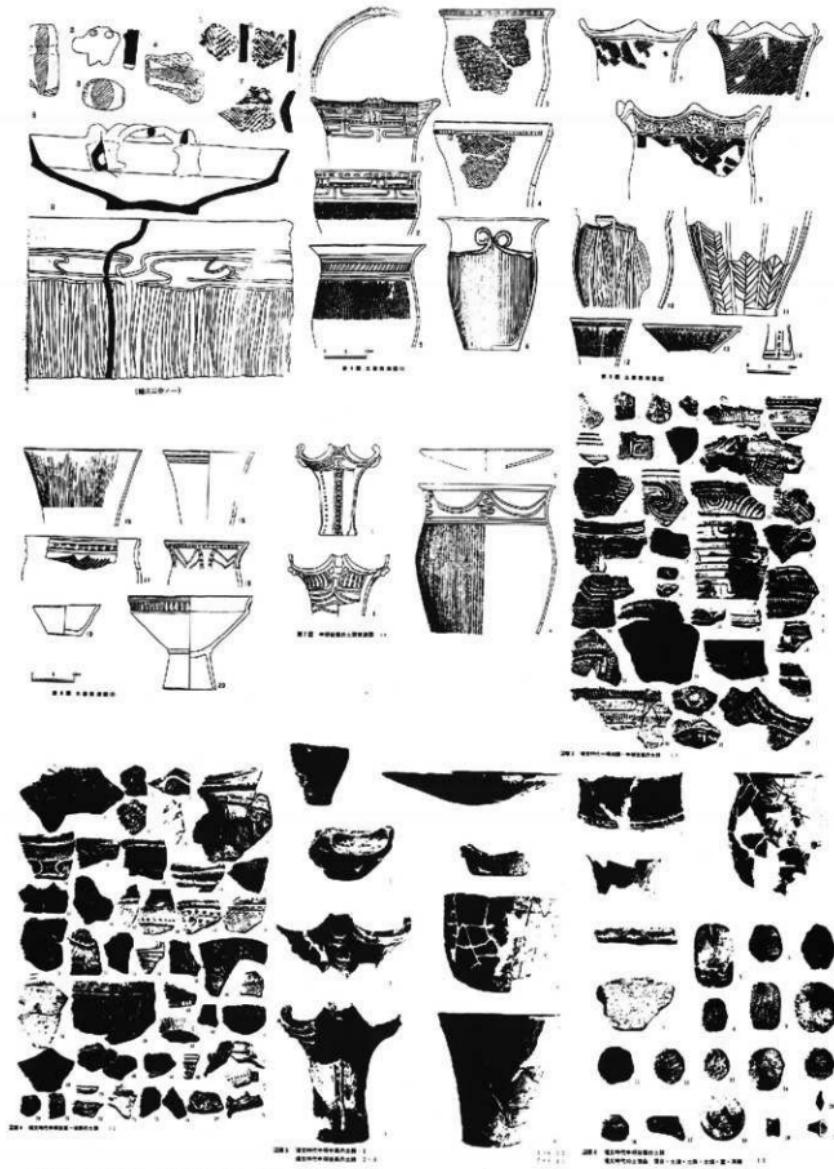
第12図 編集図 昭和24年度及び昭和46年度以降調査区位置図



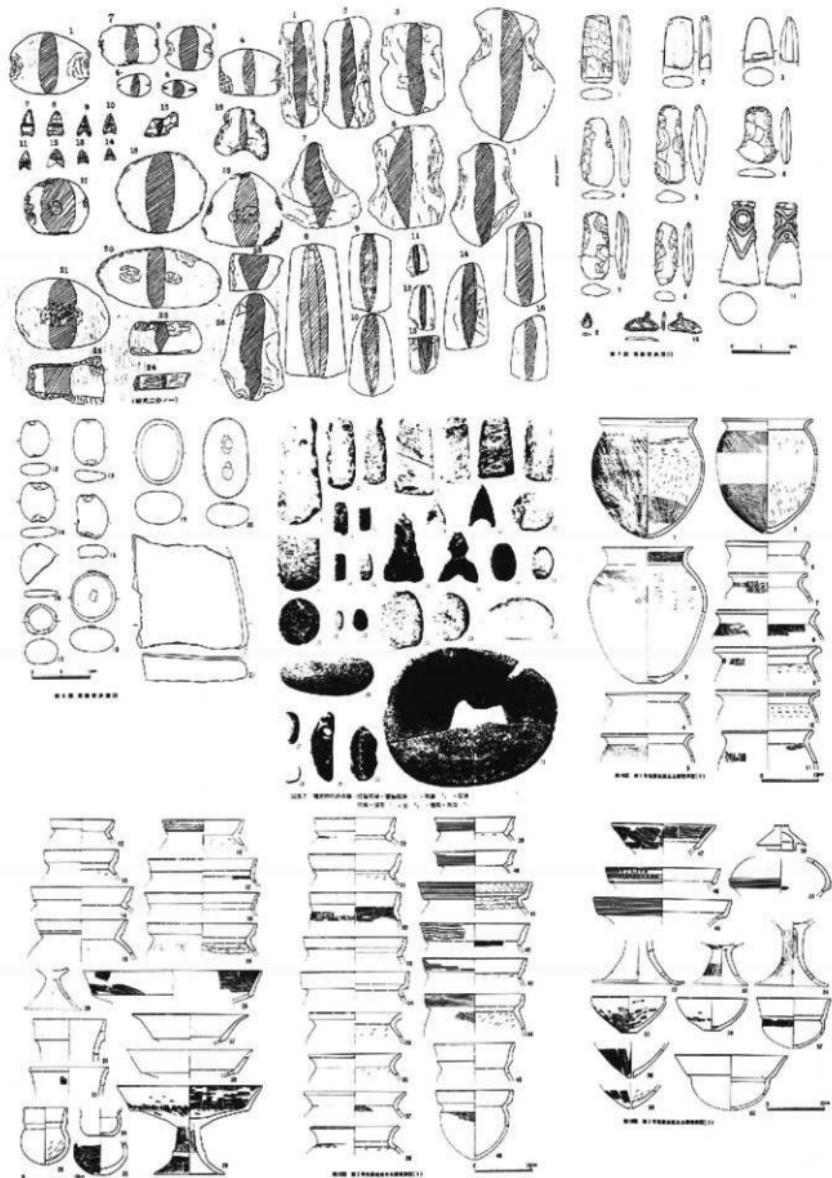
第13図 編集図 縄文時代及び古墳時代造構概略図



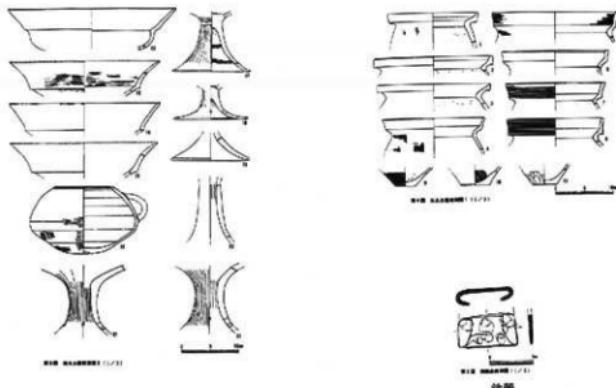
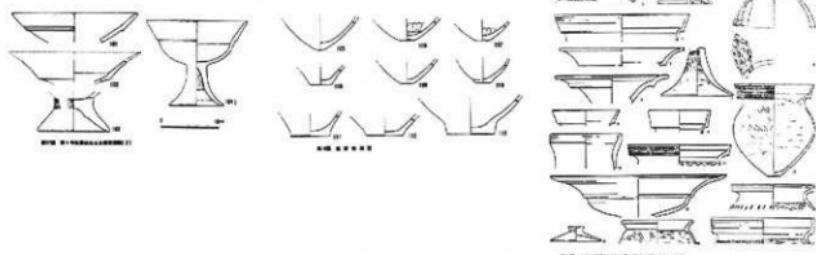
第14図 編集図 先土器時代及び縄文時代出土遺物



第15図 繪集図 繩文時代出土遺物



第16図 編集図 縄文時代（上）及び古墳時代（下）出土遺物



第17図 編集図 古墳時代出土遺物

時代	代	年代 年号	大門町の遺跡 その他
古生代	新古生代		飛騨安成岩類
中生代	ジュラ紀		来島層群 アンモナイト 手取層群
	白亜紀		新潟花こう岩類
新生代	古第三紀		太美山層群
	新第三紀	約200万年前	中新世 北陸層群 青井谷泥岩層 鮮新世 寒たい泡の時代
	第四紀 更新世		段丘堆積物 永河地形 庄川段丘れき層 立山火山の活動
	完新世		沖積層 埋没林 和田川段丘れき層
先土器時代		約1万年前	明石人三ヶ日人 串田新・生涯寺新遺跡 直坂道路大沢野町
縄文時代	草創期 早期		東縱遺跡福光町 桜崎遺跡魚津市 吉峰遺跡立山町 蠍ヶ森・小竹貝塚富山市 砺葉寺遺跡上市町
	前期	☆	小泉遺跡
	中期	☆ ★	串田新・生涯寺新遺跡 二口遺跡
	後期	☆	不動堂遺跡朝日町 天神山遺跡魚津市 勝木原遺跡高岡市
	晚期	☆	井口遺跡井口村
弥生時代	前期		石塚遺跡高岡市
	中期		布目沢北遺跡 大堀洞窟永見市
	後期	☆	串田新遺跡 圓山遺跡小杉町
古墳時代	前期	★	杉谷遺跡富山市 桜谷古墳高岡市 稚児冢古墳立山町 阿古屋野古墳群黒部市
	中期		
	後期		大塚古墳
飛鳥時代		593年	
		(推古)大化大宝	小杉丸山遺跡 大化の改新
奈良時代		-710年	
		和銅養老天平	櫛田遺跡 高瀬遺跡波切町 国分寺建立の詔

☆印は、串田新遺跡の該当する時期（★は主な時期）

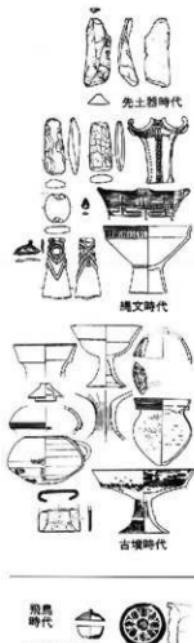


表4 串田新遺跡概要表



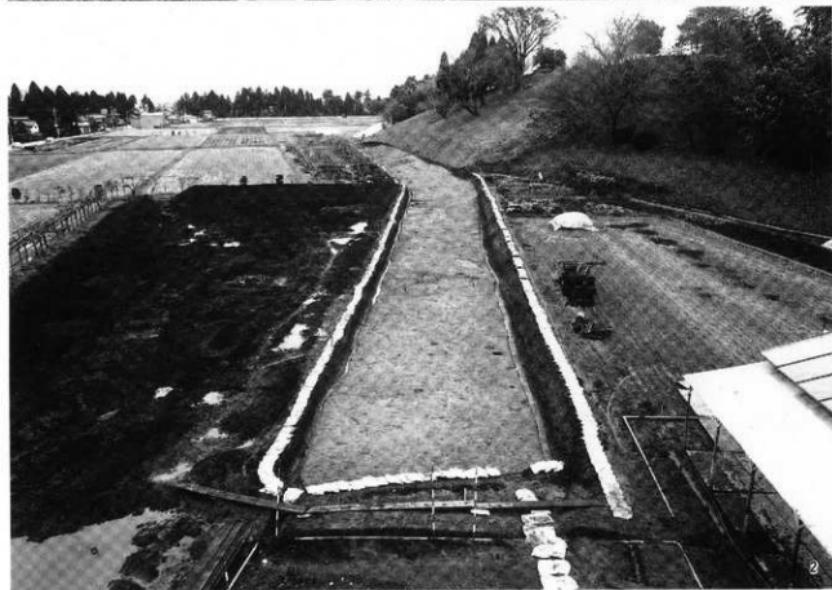
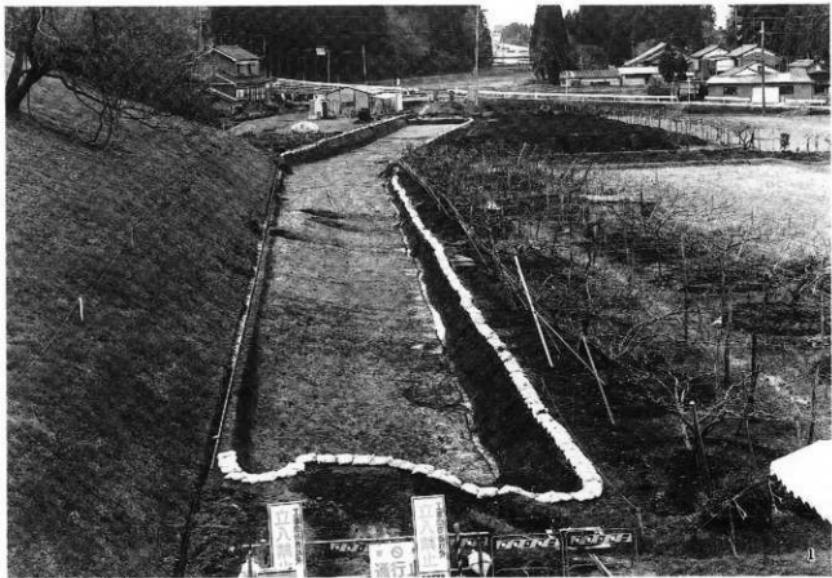
図版1 1. 遠景(西より)



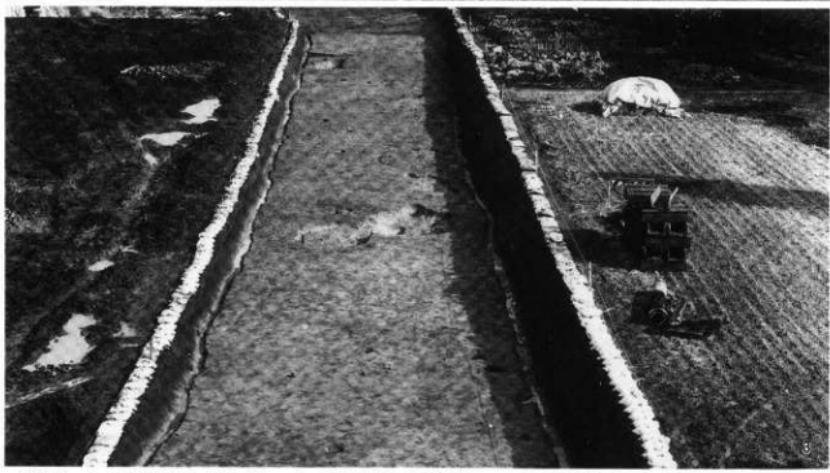
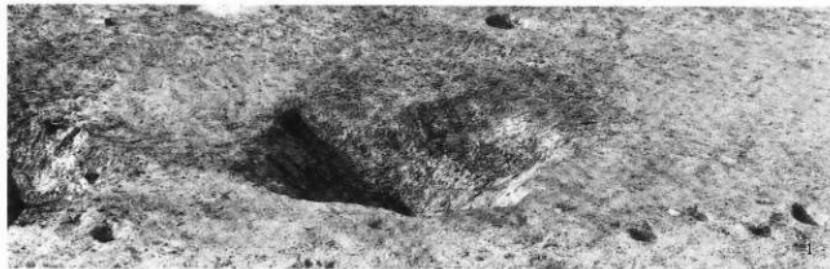
図版1 2. 遠景(南西より)



図版2 1. 遠景（南より） 2. 調査前遠景（西より） 3. 遠景（東より）



図版3 1. 全景(東より) 2. 全景(西より)



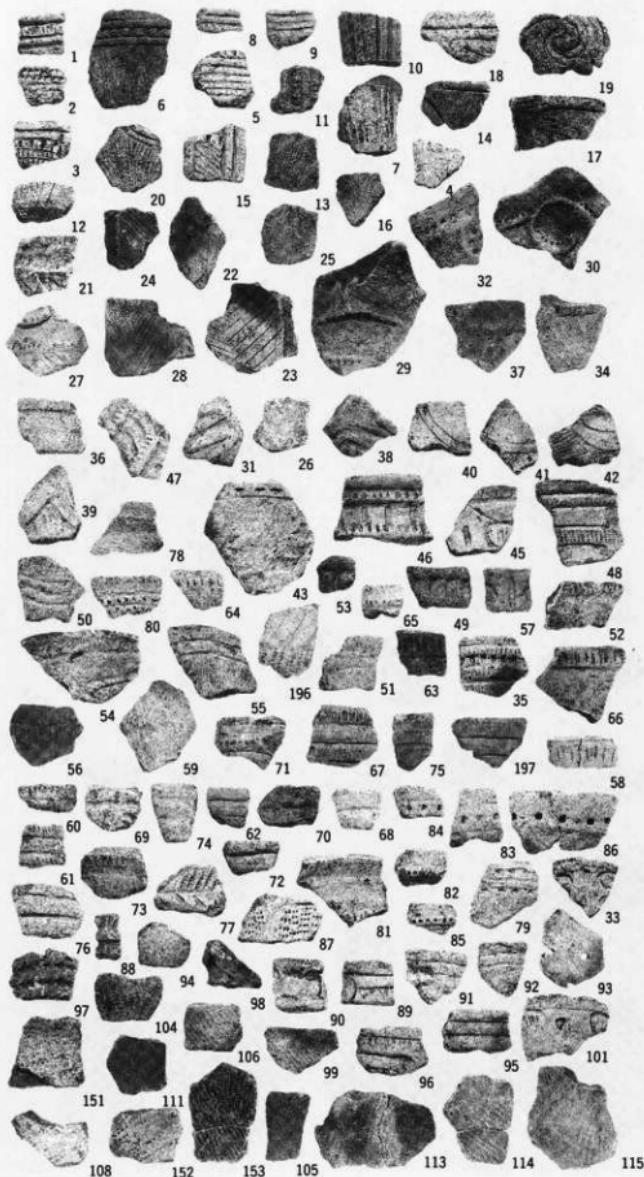
図版4 1. 調査区中央（南より） 2. 調査区中央（東より） 3. 調査区中央（西より）



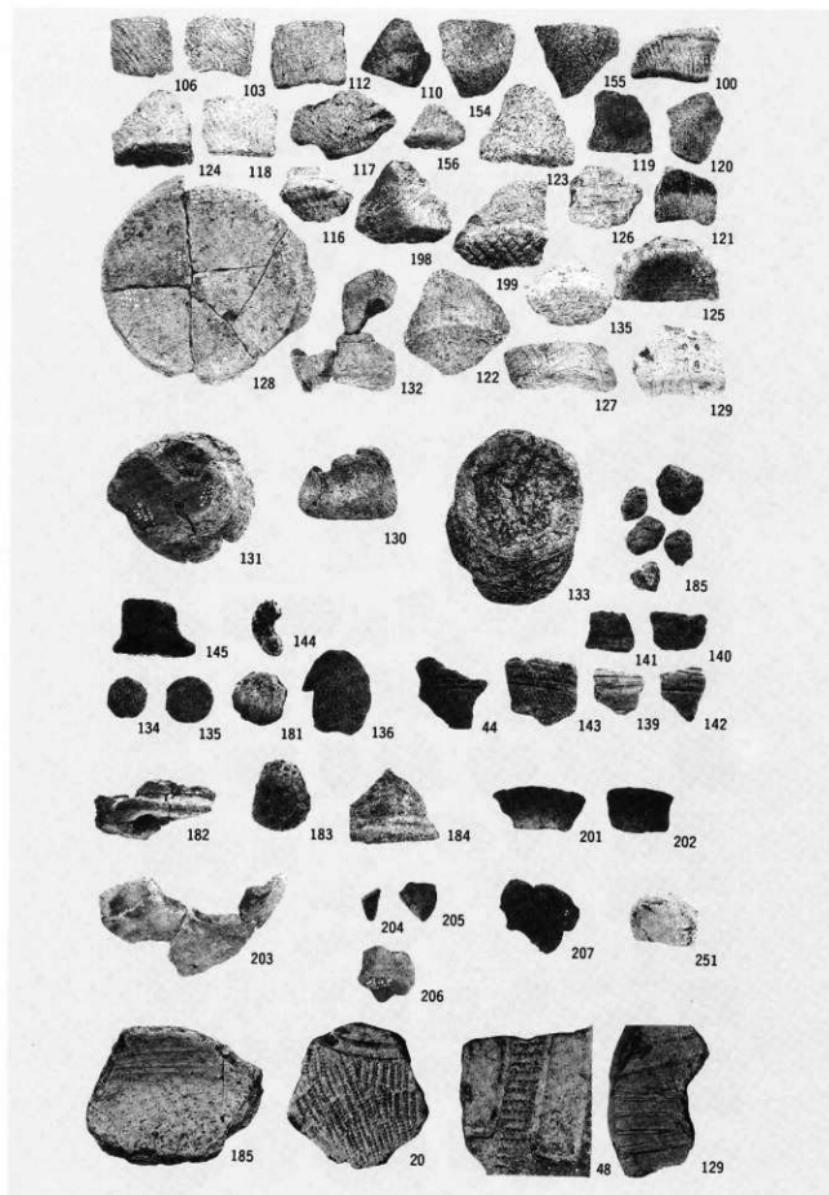
図版5 調査区中央石群出土状況 1. 東（西より） 2. 中央（西より） 3. 中央（北より）



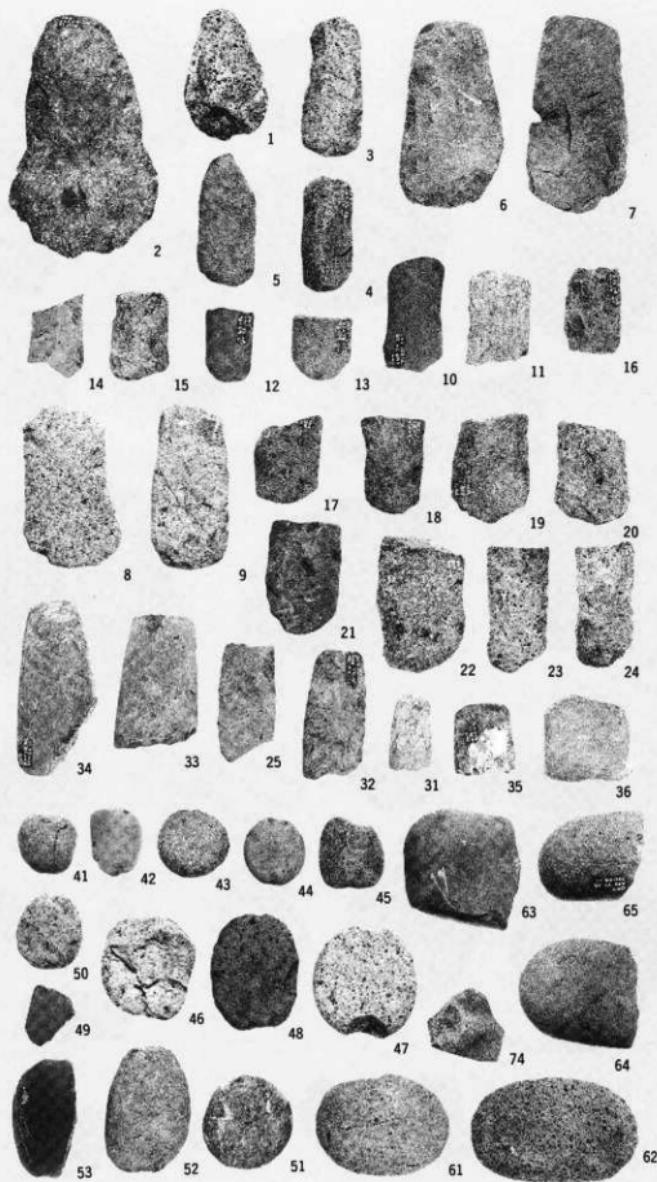
図版 6 1~7 調査区中央石群内遺物出土状況 8~11 作業風景



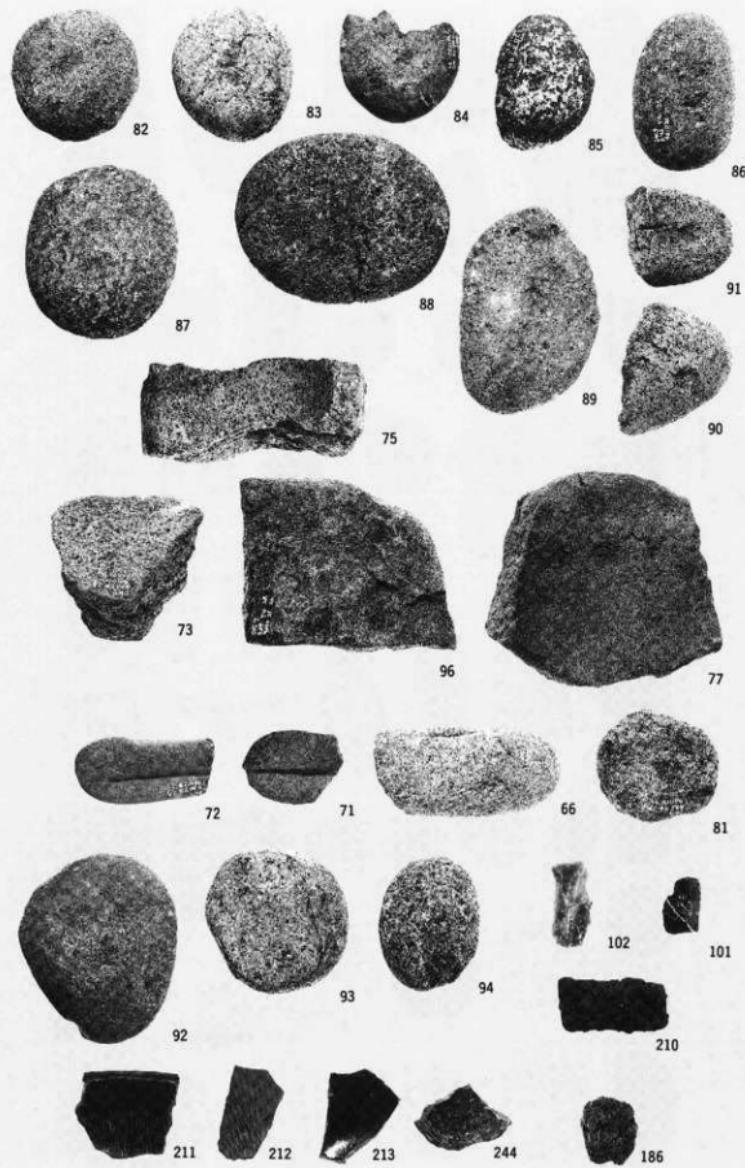
圖版 7 出土遺物土器 (1/3)



図版8 出土遺物土器土製品 (1/3) 144・145 (1/2) 下段1列 (1/1)



图版 9 出土遗物石器 (1/3)



图版10 出土遗物石器 (1/3) 353 (1/4) 372·373 (1/2)

報告書抄録 記載例 1

ふりがな	とやまけんないらんまち くじたししいせきせ のうどうせいびごどうちょうさかいりょうこうじにともなうはぐくつらようさほうこく							
書名	富山県大門町 串田新遺跡VII -農道整備事業調査改良工事に伴う発掘調査報告-							
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	9							
編著者名								
編集機関	大門町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター							
所在地	〒939 02 富山県射水郡大門町二口1081 TEL 0766-52-0410				〒930 富山市茶屋町206番3号 TEL 0764-34-2814			
発行年月日	1994年3月							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
串田新	大門町串田新	163821	382041	36°41'22"	137°1'20" ~ 19931207	1,000	農道整備事業調査改良工事に伴う調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
串田新	集落・古墳	縄文時代 中期		縄文土器 土偶 土製耳飾 円盤状土製品 打製石斧 磨製石斧 石錐 石皿 叩石 凹石				
		後期	縄文土器 土師器 鉄製品					
		古墳時代	土師器					
		平安時代	陶磁器					
		中・近世						

大門町埋蔵文化財調査報告第9集

富山県大門町

串田新遺跡 VII

農道整備事業調査改良工事に伴う発掘調査報告

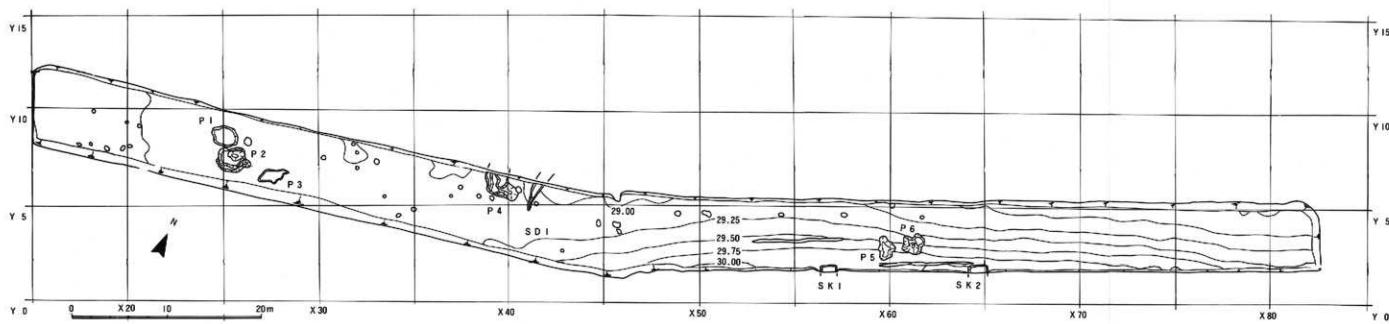
発行日 平成6年3月

発行 大門町教育委員会

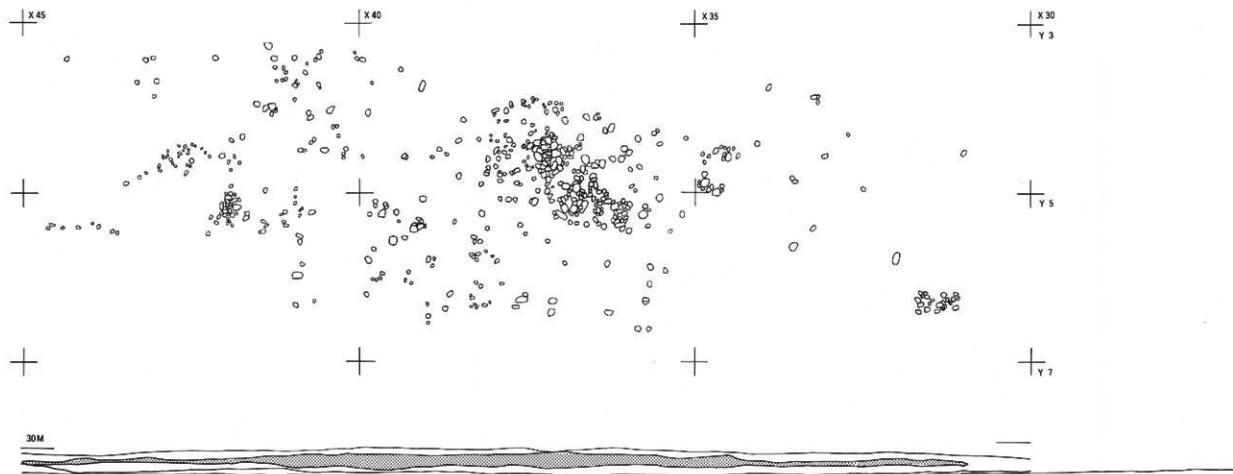
編集 大門町教育委員会

富山県埋蔵文化財センター

印刷 ルチューエツ



第19図 造構図



第20図 石群出土状況

